

大木之本遺跡発掘調査報告書

付載 留木第8号窯発掘調査報告

1991

愛知県東海市教育委員会

大木之本遺跡発掘調査報告書

付載 留木第8号窯発掘調査報告

1991

愛知県東海市教育委員会

序

本市の海岸平地には、砂の高まりがあり、近世の絵地図を見るとこうしたところに集落が営まれており、現代の町につながっています。古代においてもこうした場所で生活が営まれていたと思われます。

今回発掘調査を行った養父町の大木之本の地区は、こうした町のはずれにあり、たまねぎ畑が広がっており、ここに往時に人が生活していたとは、まったく想像できないところでした。わずかな遺物の散布を手掛かりに試掘調査も踏まえ、発掘調査を実施したところ地下1.3mほどのところから、古代の竪穴住居跡や掘立柱の建物跡などの遺構のほか、当地方ではめずらしい円面硯などが見つかりました。

いつものことながら思わぬところから、古代人が出現し、生活のようすを説き明かしはじめました。この遺跡はまだまだ周辺に広がっており、さらに新たな情報を得るため、注目していかなければなりません。

とりあえず道路になる部分の発掘調査を実施しましたので、その結果をまとめました。

また、昭和58年に発掘調査を実施した加木屋町の留木第8号窯の結果もまとめました。

本書が埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり、あわせて古代史研究の資料としてご活用いただけることを願うものです。

おわりに、この調査に際しご協力をいただきました地元の方々をはじめ、関係各位に心からお礼申し上げます。

平成3年3月

愛知県東海市教育委員会教育長

森 本 良 三

例 言

- 1 本書は、愛知県東海市養父町大木之本1-3、11-1、14、15-1、16、16-1・2、18-1、39、40-1、41、43、52、53、54-1・2、56-1、66-1に所在する大木之本遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は、都市計画道路養父森岡線の道路工事に起因し、遺跡は、一部を除き滅失した。
愛知県遺跡分布地図(Ⅱ 知多・西三河 1988)に掲載する遺跡番号は、43078である。
- 2 本発掘調査の現地調査は、昭和63年4月25日から6月15日までを要した。
- 3 付載の留木第8号窯について
付載した留木第8号窯は、愛知県東海市加木屋町留木48-4、6に所在する。発掘調査は土砂取りに起因し、残存した窯の一部及び灰原の調査を実施したが、その後、土砂取りが中止されたため、遺跡の一部は残存する。
本発掘調査の現地調査は、昭和58年(1984)6月21日から6月30日までを要した。
愛知県遺跡分布地図(Ⅱ 知多・西三河 1988)に掲載する遺跡番号は、43098である。
- 4 本書で使用した方位は磁北(真北約6度30分西偏)である。高さの基準は東京湾の平均海面である。ただし、図5の調査区配置図のメッシュは、国土地理院第Ⅳ系によるものである。
- 5 図版掲載の遺物に付した番号は、挿図の遺物番号である。
- 6 本書の執筆、編集は、付載もあわせて立松彰が行った。
- 7 遺物の整理は、青木 修、浅水 香、大久保淳子、小笠原久美子、松田雅恵、森 和代の協力を得て、調査担当者がこれに当たった。
- 8 出土遺物、調査関係記録類は、東海市立郷土資料館にて保管する。

目 次

序

例言

大木之本遺跡発掘調査報告

第1	遺跡の立地と歴史的環境	1
第2	調査の経緯	5
第3	遺構	7
1	遺跡の土層	7
2	遺構の分布	8
3	竪穴住居跡と遺物	11
4	掘立柱建物跡と遺物	25
5	井戸	27
6	埋葬穴	28
7	3区の穴	28
8	5区の穴	30
9	貝塚と遺物	31
第4	遺物	37
1	弥生時代	37
2	古墳時代	37
3	奈良・平安時代	38
4	中世以降の遺物	45
第5	まとめ	47
	集落の変遷	47

付載 留木第8号窯発掘調査報告

第1	位置	51
第2	調査の経緯	52
第3	遺構	53
第4	遺物	56
第5	まとめ	61

挿 図 目 次

大木之本遺跡発掘調査報告

図 1	大木之本遺跡周辺の航空写真	2
図 2	大木之本遺跡周辺の遺跡分布図	3
図 3	大木之本遺跡周辺地形図	6
図 4	土層模式図	7
図 5	調査区配置図	8
図 6	1区・2区遺構図	9
図 7	3区・6区・8区遺構図	10
図 8	1号竪穴住居跡平面・断面図	12
図 9	1号竪穴住居跡かまど平面・断面図	12
図10	1号竪穴住居跡出土遺物	13
図11	3号竪穴住居跡平面・断面図	14
図12	3号・6号竪穴住居跡出土遺物	15
図13	6号竪穴住居跡平面・断面図	16
図14	2号竪穴住居跡平面・断面図	17
図15	2号竪穴住居跡かまど平面・断面図	18
図16	2号竪穴住居跡出土遺物 1	18
図17	2号竪穴住居跡出土遺物 2	19
図18	4号竪穴住居跡かまど平面・断面図	20
図19	4号竪穴住居跡出土遺物	21
図20	5号竪穴住居跡平面・断面図及び出土遺物	22
図21	7号竪穴住居跡平面・断面図及び出土遺物	23
図22	8号竪穴住居跡平面・断面図及び出土遺物	24
図23	掘立柱建物跡模式図	25
図24	4区・5区・7区遺構図	26
図25	井戸平面・断面図及び出土遺物	27
図26	埋葬穴平面・断面図	28
図27	3区穴平面・断面図及び出土遺物	29
図28	5区・7区穴平面・断面図及び出土遺物	30
図29	1号貝塚出土遺物	31
図30	1号・2号・3号貝塚断面・平面図	32

図31	2号貝塚出土遺物	33
図32	3号貝塚出土遺物1	33
図33	3号貝塚出土遺物2	34
図34	弥生土器・土師器拓影図	37
図35	古墳時代の須恵器・土師器	38
図36	奈良・平安時代の須恵器1	39
図37	奈良・平安時代の須恵器2	40
図38	奈良・平安時代の土師器	41
図39	奈良・平安時代の灰釉陶器	42
図40	奈良・平安時代の鉄製品	42
図41	奈良・平安時代の石器	43
図42	奈良・平安時代の土錘	43
図43	奈良・平安時代の製塩土器	44
図44	奈良・平安時代の瓦	45
図45	中世以降の出土遺物1	45
図46	中世以降の出土遺物2	46

付載・留木第8号窯発掘調査報告

図1	留木第8号窯周辺地形図	51
図2	留木第8号窯分焰柱正面・側面図	53
図3	分焰柱構造模式図	54
図4	留木第8号窯平面・断面図	55
図5	留木第8号窯出土遺物1	63
図6	留木第8号窯出土遺物2	64
図7	留木第8号窯〔燃烧室〕出土遺物3	65
図8	留木第8号窯出土遺物4	66
図9	留木第8号窯出土遺物5	67
図10	留木第8号窯出土遺物6	68
図11	留木第8号窯出土遺物7	69
図12	留木第8号窯出土遺物8	70
図13	留木第8号窯出土遺物9	71
図14	留木第8号窯出土遺物10	72

図15	留木第8号窯出土遺物11	73
図16	留木第8号窯出土遺物12	74
図17	留木第8号窯出土遺物13	75
図18	留木第8号窯出土遺物14	76
図19	留木第8号窯出土遺物15	77
図20	留木第8号窯出土遺物16	78
図21	留木第8号窯出土遺物17	79
図22	留木第8号窯出土遺物18	80
図23	留木第8号窯出土遺物19	81

表 目 次

大木之本遺跡発掘調査報告

表1	大木之本遺跡周辺の道跡	4
表2	大木之本遺跡の貝類組成	36
付載 留木第8号窯発掘調査報告		
表	留木第8号窯断面図	54

図版目次

図版1	上 1区・7号竪穴住居跡 下 1区・7号竪穴住居跡
図版2	上 1区井戸と7号竪穴住居跡 下 1区(7号竪穴住居跡南西側)遺物出土状態
図版3	上 1区井戸 下 井戸断面
図版4	上 2区竪穴住居跡群 下 2区竪穴住居跡
図版5	上 2区竪穴住居跡 下 2区・1号・3号・6号竪穴住居跡
図版6	上 2区・1号竪穴住居跡かまど 下 同上
図版7	上下 2区・2号竪穴住居跡
図版8	上 2号竪穴住居跡かまど 下 2号竪穴住居跡かまど周辺
図版9	上 2区・4号竪穴住居跡 下 同上かまど
図版10	上 2区・5号竪穴住居跡 下 5号竪穴住居跡かまど
図版11	上 2区竪穴住居跡(手前5号・奥1号) 下 2区埋葬穴

- 図版12 上 4区・8号竪穴住居跡 下 同上粘土面部分
 図版13 上 3区遺構検出状態 下 3区・穴3-1遺構
 図版14 上 4区遺構検出状態 下 5区遺構検出状態
 図版15 上 5区遺構検出状態 下 8区遺構検出状態
 図版16 上 1区・1号貝塚断面 下 2区・2号貝塚検出状態
 図版17 上下 8区・3号貝塚遺物出土状態
 図版18 上 遺物出土状態(須恵器蓋) 下 同上(「太」墨書土器)
 図版19 8区出土土師器(鉢形土器・甕形土器・高杯形土器)
 図版20 須恵器(円面硯・鉢・長頸瓶・盤)
 図版21 須恵器蓋
 図版22 須恵器杯
 図版23 須恵器杯
 図版24 甕形土器
 図版25 甕形土器(竪穴住居跡出土)
 図版26 上 甕形土器 下・土錘
 図版27 鉄製品(釣針・鎌・刀子など)
 図版28 刀子と墨書土器
 図版29 石器(くほみ石・砥石)
 図版30 砥石・土師器・鹿角
 図版31 上 知多式製塩土器杯口縁部 下 同上脚部
 図版32 上 各地区出土獣骨類 下 3号貝塚出土獣骨類
 図版33 上 陰刻花文灰釉椀皿 下 中国製青磁類
 図版34 灰釉陶器
 図版35 山茶碗と小皿
 図版36 小皿と錢貨
 図版37 硯・陶丸・土師質皿など
 図版38 上 中世以降の土師器系土器 下 天目茶碗

留木第8号窯関係

- 図版39 上・留木古窯全景 下・留木古窯前庭部
 図版40 上・留木古窯分焰柱 下・同上

- 図版41 上・留木古窯全景 下・留木古窯灰原
 図版42 上・留木古窯出土山茶碗 (A類) 下・同上底面
 図版43 上・留木古窯出土山茶碗 (A類) 下・同上
 図版44 上・留木古窯出土山茶碗 (B類) 下・同上底面
 図版45 上・留木古窯出土山茶碗 (C1類) 下・同上底面
 図版46 上・留木古窯出土山茶碗 (C2類) 下・同上底面
 図版47 上・留木古窯出土山茶碗 (D類) 下・同上底面
 図版48 上・留木古窯出土山茶碗 (E1類) 下・同上底面
 図版49 上・留木古窯出土山茶碗 (E2類) 下・同上底面
 図版50 上・留木古窯出土山茶碗 (F類) 下・同上底面
 図版51 上・留木古窯出土山茶碗 (G類) 下・同上底面
 図版52 留木古窯出土小皿 (a類)
 図版53 留木古窯出土小皿 (b類・a類)
 図版54 留木古窯出土小皿 (d類・e類)
 図版55 留木古窯出土小皿 (e類)
 図版56 上・留木古窯出土片口鉢 (I類) 下・同上底面
 図版57 上・留木古窯出土片口鉢 (II類) 下・同上底面
 図版58 上・留木古窯出土片口鉢 (III類) 下・同上 (I類)
 図版59 上・留木古窯出土片口鉢 (IV類) 下・同上底面
 図版60 上・留木古窯出土片口山茶碗 下左・焼台と山茶碗の重なり状態 下右・円盤状
 陶製粘土塊
 図版61 上・留木古窯出土台付碗 下・同上片口小壺
 図版62 上・留木古窯出土短頸壺・玉縁口縁壺・片口碗 下・同上広口壺
 図版63 上・留木古窯出土広口壺 下・同上肩部沈線
 図版64 上・留木古窯出土陶丸 下・大甕胴部格子目の押印文

第1 遺跡の立地と歴史的環境

おおきのもと
大木之本遺跡は愛知県東海市養父町大木之本1-3、11-1ほか¹に所在する古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺跡である。遺跡所在地は、名古屋鉄道常滑線尾張横須賀駅の南、約500mを、北西から南東方向に伸びる都市計画道路養父森岡線²内に位置する。道路の北側には、東海市立養父保育園や熱田神社がある。

この地は、知多半島北部の伊勢湾岸にあり、半島の中では広い海岸平地を形成しているところである。この海岸平地には、海岸から内陸の丘陵地寄りにかけて標高3mほどの三条の砂堆列が認められる。本遺跡は、この砂堆列の最も海岸よりの砂堆上の内陸寄りに立地する。この砂堆は、北東から南西にかけて長さ約3km、幅約0.6kmの規模をもち、ほぼ中央を信濃川が横断する（図1・2参照）。

遺跡は、信濃川で区切られた北半の内陸寄りの東側に立地し、さらに東側は、低湿地が広がっている。この砂堆の西側の端が往時の海岸線であったが、江戸時代にその地先に新田が埋築された。現在では、さらにその先に、名古屋南部臨海工業地帯の工場群が広がっており、遺跡の立地した砂堆が、海岸平地の内陸に位置したような景観になっている。

大木之本遺跡が営まれた海岸平地には、弥生時代以降中世にかけての各種の遺跡が分布する。この地の海岸平地は、縄文時代後期までには形成されたものとみられるが、ここで本格的な活動が始まったのは、弥生時代初頭のことである。それ以前の遺跡としては、海岸寄りに伸びた丘陵上に縄文時代前期以降の小規模な遺跡が二、三か所営まれているに過ぎない。

弥生時代になると海岸平地の三条の砂堆の微高地上で前期の水神平式土器や遠賀川式土器が伴う規模の小さい荒古遺跡や細見遺跡が営まれ始める。以後、弥生時代を通じて集落は次第に範囲を広げ、中期には野崎遺跡や獅子懸遺跡などが形成され、その後、貝田町式土器や瓜郷式土器の伴う時期になると、遺跡の規模も拡大しさらに広がり始め、弥生文化が定着、発展していくようすがうかがえる。砂堆間の低湿地が水稻耕作に適しており、生産量を増大させていったのであろう。後期の山中式土器の伴う時期になると平地を見下ろす標高28m前後の丘陵上に中ノ池遺跡などが営まれ始める。

砂堆上に営まれた弥生時代の遺跡は、古墳時代にも引き続いていく。古墳時代前期になると、瀬戸内及び紀淡地方から土器製塩の技術が、半島北部の伊勢湾岸に伝わり、以後、6世紀ころから半島全域の海岸で土器製塩が盛んに行われ始める。この地方における土器製塩は奈良時代の8世紀ころが最も盛んで、大木之本遺跡の立地する砂堆の海岸寄りにもこの時代の製塩遺跡が数多く分布している。



図1 大木之本遺跡周辺の航空写真 (1946年頃)

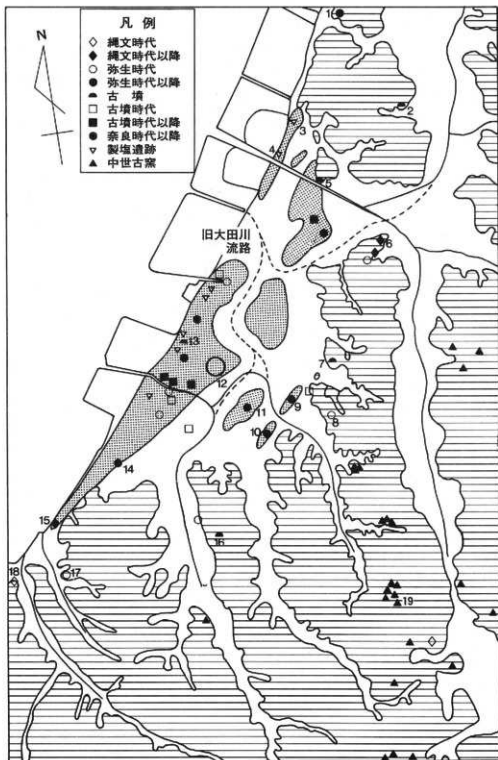


図2 大木之本遺跡周辺の遺跡分布図 (スケールおよそ 1/50,000)

この平地を見下ろす丘陵に、知多半島では最大規模の横穴式石室をもつ岩屋口古墳が、古墳時代後期Ⅱ期（6世紀末～7世紀初頭）ころに築造され、稲作農耕と漁撈と塩作りを行うムラの規模も拡大し、そこで生活する人びとのあいだに階層分化が進み、古墳を築くことのできる有力な豪族が現れてきたことを物語っている。

やがて、大化の改新を経て、7世紀末ないし8世紀の初めのころに律令国家体制が成立するが、この時期に法海寺の地に寺院が建立される。また、砂堆周の低地には、古代の条里遺構としては半島内で最も大きい区画が想定されている。こうした地域ではあるが、奈良・平安時代の遺跡は、砂堆の各所で遺物が散見されるもののみを持ち遺跡がなかった。こうした状況から見て、この時代の遺跡は、近世から現代につながる集落の下に埋没してしまったものと考えられていた。しかし、地域によっては、今回の発掘調査によって明らかになった大木之本遺跡のように良好な状態で存在していることが分かった。

平安時代終末期になると、丘陵に社山古窯が繁かれ、窯業生産も始まった。

このように本遺跡周辺は、原始、古代の遺跡が数多く立地する地域である。

大木之本遺跡は、奈良・平安時代の8世紀後半から9世紀を主要時期としており、この時代の遺跡としては、現在のところ、最もまとまりを持っている。

表1 大木之本遺跡周辺の遺跡（番号は、図2の番号に対応する）

番号	遺跡名	所在地	時代
1	観音寺遺跡	東海市荒尾町	弥生後期
2	丸根古墳	東海市荒尾町	後期古墳
3	松崎遺跡	東海市大田町	古墳～平安
4	下浜田遺跡	東海市大田町	奈良
5	王塚古墳	東海市大田町	後期古墳
6	高ノ御前遺跡	東海市大田町	縄文前期～
7	岩屋口古墳	東海市高横須賀町	後期古墳
8	中ノ池遺跡	東海市中ノ池	弥生後期
9	柳ヶ坪遺跡	東海市高横須賀町	弥生後期
10	野崎遺跡	知多市八幡	弥生中期
11	獅子懸遺跡	知多市八幡	弥生中期
12	大木之本遺跡	東海市養父町	古墳～
13	釈迦御堂古墳	東海市養父町	後期古墳
14	法海寺遺跡	知多市八幡	弥生～平安
15	細見遺跡	知多市八幡	縄文・弥生前期～中世
16	岩之脇古墳	知多市八幡	後期古墳
17	大廻間遺跡	知多市八幡	弥生後期
18	西屋敷貝塚	知多市新知	縄文晩期
19	留木古窯群	東海市加木屋町	平安末期～鎌倉

第2 調査の経緯

東海市養父町大木之本の北東に接する宮山の一部に土師器・須恵器・山茶碗などの遺物の散布が見られることから、昭和56年11月に東海市教育委員会が作成した「東海市遺跡分布地図」において、宮山遺跡として記載された遺跡がある。

この地区を通る都市計画道路養父森岡線の道路工事を、用地取得が済み次第着工する旨、昭和62年度に担当の東海市役所都市開発部都市計画課から教育委員会に対して通知があり、遺跡有無の確認申請がなされた。これを受けて、道路用地周辺の分布調査を実施したところ、大木之本地区の線路寄りにもわずかではあるが須恵器などの遺物が散布していることが分かった。このため、遺跡の有無と範囲の確認の試掘調査を実施した。四か所の試掘調査の結果、遺物の出土は少ないものの、遺物包含層が道路のほぼ全域にわたって堆積していることが分かった。道路の計画変更は出来ないため、道路工事が手前に発掘調査を実施することになった。

道路工事は、昭和63年度中には実施できる見通しとなったため、昭和63年4月に入りすぐに発掘調査の準備に取りかかった。全面を発掘した場合、排土を置く場所が確保できないため、調査区域を分割して、一区画（区画は、西から東へ向かって1～8区を設定）ずつ調査し、埋め戻していくことにした。調査は西端の線路寄りから着手し、順次、東側へと進めることにした。4月25日から発掘調査の準備にかかり、4月28日に重機によって1区の表土除去に取りかかった。全体的に30cmほどの耕作土を除去し、ついで手掘りで下層の調査にかかった。遺物の混入の少ない遺物包含層が50cmほど堆積しており、その下に遺構面を確認した。各遺構は、海岸寄りの砂堆の砂地に掘り込まれていることから、プランが明確ではなく、検出に時間がかかったが、遺構が壊れやすい砂地には割合良好な状態で検出することができた。遺構の調査と実測、写真撮影を終えては、埋め戻し、次の区画の調査へと取りかかった。他の区画も遺構面までの深さに違いがあるものの、遺物包含層、遺構の状態は、ほぼ同様であった。発掘作業は、6月15日に終了した。こうして、東西に160mほど伸びる道路用地内を、約850㎡発掘調査を実施したのであるが、遺跡の範囲は、そのあり方からみて、相当広い範囲に及ぶものと考えられる。

なお、調査組織は、次のとおりである。

調査主体	東海市教育委員会
調査担当者	立松 彰（東海市教育委員会社会教育課主査）
調査員	青木 修（奈良大学OB）
発掘作業	㈱ オームラ組

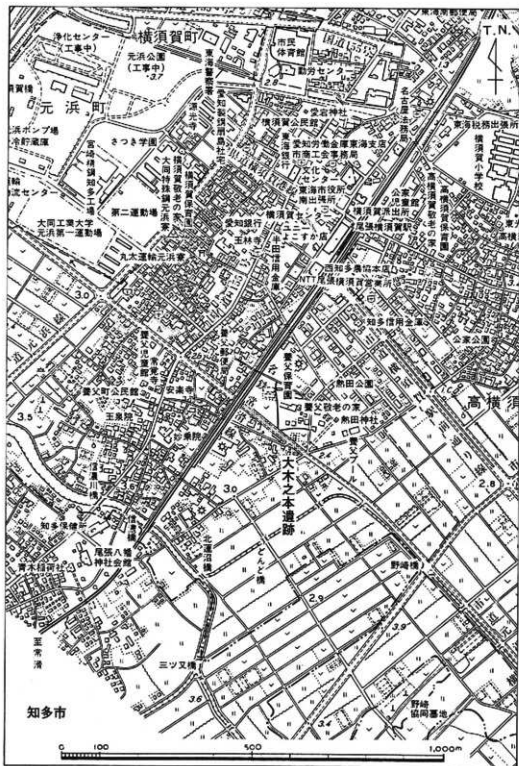


図3 大木之本遺跡周辺地形図

第3 遺 構

1 遺跡の土層 (図4)

大木之本遺跡発掘調査区の長さは、名古屋鉄道常滑線の線路寄りの1区(図5参照)から南東の熱田神社寄りの8区にかけて約160mに及ぶ。遺構面は、北東の1区側が最も高く標高約2.2m、5区が最も低く標高約1.2mで、南東の8区になるとそれよりやや高まり標高1.4mほどである。2区の堅穴住居跡が分布する区域と、5区の掘立柱建物跡の柱穴が分布する区域は、周囲に比べややくぼんだ箇所形成されている。

遺跡を覆う土層について見てみる。現在、たまねぎなどが植え付けられている灰色の砂質の耕作土が約20cm、その下に、やはり20cmほどの黄褐色砂層が堆積し、これらの層は、ほとんど無遺物である。次に、30cmから60cmほどの黒褐色砂層が覆う。この層も、遺物の混入はわずかであり、地表面の観察による調査では遺跡の存在が確認できない遺跡である。遺物は、この層の下層の遺構面近くから出土する。以上の3層が遺跡の全体を覆い、遺構面に達している。2区の5区の住居などが形成されたくぼんだ区域と、8区においては、さらに別の層が覆っている。

遺構として、古墳時代の貝塚、奈良から平安時代の堅穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、鎌倉時代の貝塚などがあるが、これらの遺構面には高低差がなく、遺物も各時代の物が混じりあっており、各時代における明確な遺構面は検出できない。

遺物の出土量は、それほど多くないが、堆積する土層が砂層であることから、破損の度合いが少ない。

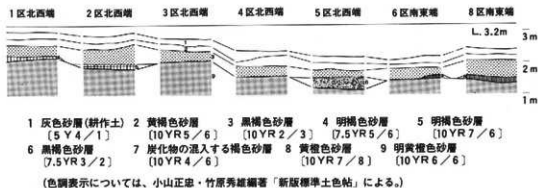


図4 土層模式図(北東側壁)

2 遺構の分布 (図5・6・7・24)

本遺跡は、幅およそ600mほどの砂堆上に立地しており、旧海岸線から約450mほど内陸寄りに位置し、調査区の南東端に位置する8区あたりが砂堆の縁に当たるものと見られる。

古い時代順に遺構の分布を見てみると、まず、古墳時代の小規模な貝塚(3号貝塚)が、遺跡の南東端の8区に所在する。この貝塚の中と周辺から、土師器の高杯形土器、壺形土器、甕形土器などが出土している。これに伴う遺構は、調査区域内では検出されなかった。

その後空白の時期があって、8世紀後半ころになると堅穴住居群が2区方面に形成される。1・2区に分布する7軒の堅穴住居跡は、南北に帯状に広がる様相を示している。この群から東へ25mほど離れて4区に1軒が所在している。この間の3区には堅穴住居跡の遺構は、検出できなかったが、甕形土器や炭化物のほかかまどを築くのに使用したものと同様の粘質土(山砂)のかたまりなどが分布しており、堅穴住居が設けられていた可能性も認められる。また、この時期のものと思われる井戸跡を1区において検出している。

9世紀後半になると4・5区方面に掘立柱建物群が設けられる。この掘立柱建物跡群は、柱穴が、4区でみる限り堅穴住居跡を貫いていることと、周辺の遺物の時期が新しくなることから、堅穴住居が廃絶した後に形成されたものと考えられる。

それから、平安時代後期のものとみられる貝塚(2号貝塚)が2区の北端に、平安時代終末期から鎌倉時代にかけての貝塚(1号貝塚)が、1区の西端に所在する。

このほか、埋葬穴を1か所検出している。



図5 調査区配置図

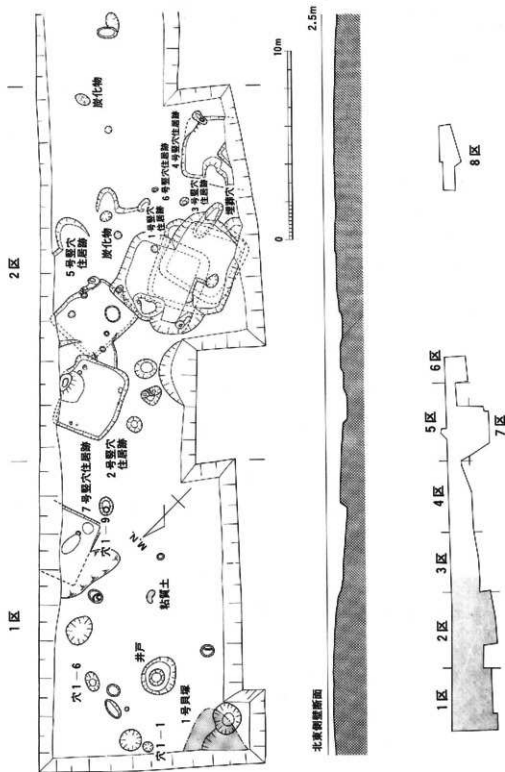


图6 1区・2区透视图

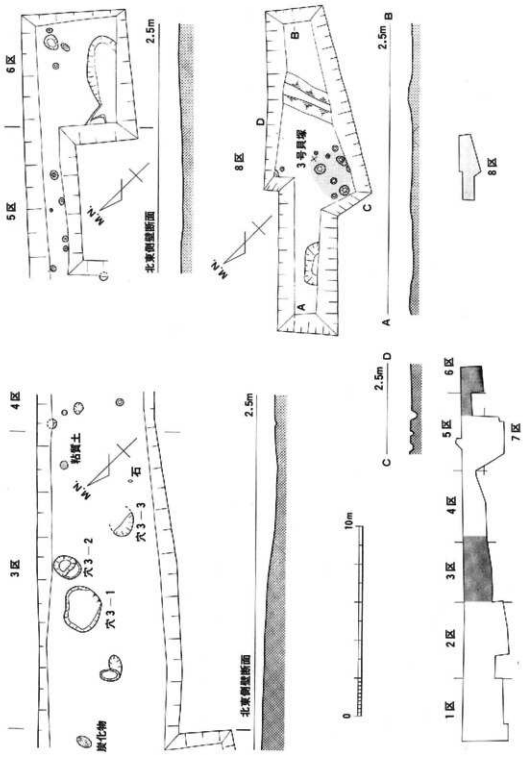


图7 3区·6区·8区遗址图

3 竪穴住居跡と遺物

(1) 1号竪穴住居跡 (図8・9・10)

遺構 3号と6号竪穴住居跡と重複し、壁の南側がなくなっている。規模は、4.5mの方形で、深さが45cmほどである。柱穴は検出できなかった。ただ、東側の角に1か所10cmほどのくぼみがあり、位置から見て柱穴であった可能性がある。竪穴住居跡の北側の壁の中央にかまどを設けている。かまどは砂質分の多い黄褐色の粘質土で築かれている。大きさは、壁に沿っての幅が1.6m、床面側への張り出しが1.1mほどで、不整の円形をしている。床面からの残存する高さは20cmである。かまど自体は、埋没過程で生じたと思われるが、全体が黄褐色の粘質土で覆われてしまっており、構造については不明確である。このかまどを立ち割ってみると、中に、赤褐色の焼け土の小さなかたまりと炭化物が混入した黒色砂が13cmほどの厚みで詰まっており、長胴形の変形土器の底部の破片と製塩土器が出土した。内側は、かまど自体を構築した黄褐色の粘質土も焼けて赤っぽくなっている。この境目を追っていくと、燃烧部は直径約80cmの円形になっており、焚口が幅30cmほど開いている。かまど自体の壁の厚みは20cmほどである。かまど上部の右上肩の所に、杯が置かれていた。

遺物 3号・6号竪穴住居跡と重複しており、かつ、各住居跡の掘形と埋積土と床面を区分することができなかったため、各竪穴住居跡に伴う遺物を明確にできなかった。ただし、1号竪穴住居跡については、かまどの周辺の床面に、薄く黒色砂層が分布しており、この層とかまどから出土した遺物は、この住居跡に伴うものとしてとらえることができた。

以下、それらの遺物について述べる。

かまど自体に伴う遺物としては、焚口内から土師器の長胴形の変形土器7 (報告書内の遺物に付した番号を示す) と製塩土器の台脚17・18が、また、かまど外側の右肩から須恵器の有台杯4が出土した。変形土器7は、大変薄く作られており、内面の調整も丁寧である。製塩土器の台脚17は、知多式製塩土器4類のうちに含められるが、この類の中では台脚が長くなって大型化した時期のものである。

かまど周辺の床面からは、須恵器の無台杯1・2・3、土師器の杯5、変形土器6・9～11、製塩土器12～16、砥石8が出土した。土師器の杯5の底面は、へら削りによって調整されている。変形土器6・9は7に比べると砂粒が多く見受けられるが、薄く仕上げられている。製塩土器12～16は、杯部の細片とともにビニール袋で1袋分が一括して出土したもので、台脚は15と16の2点のみが混じっていた。製塩土器14は他のものに比べ砂粒の混入が多い。

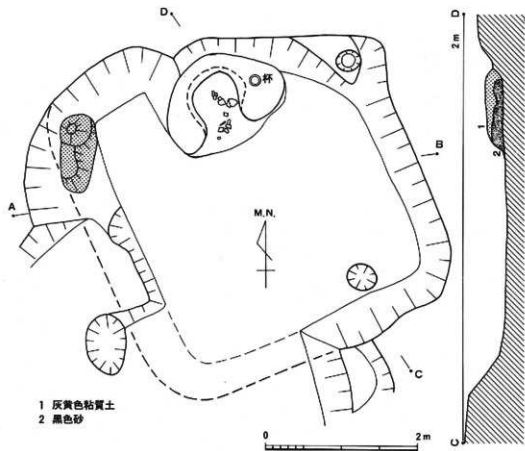


図8 1号竪穴住居跡平面・断面図

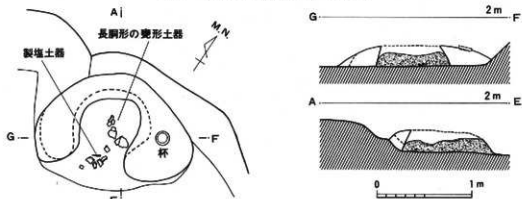


図9 1号竪穴住居跡かまど平面・断面図

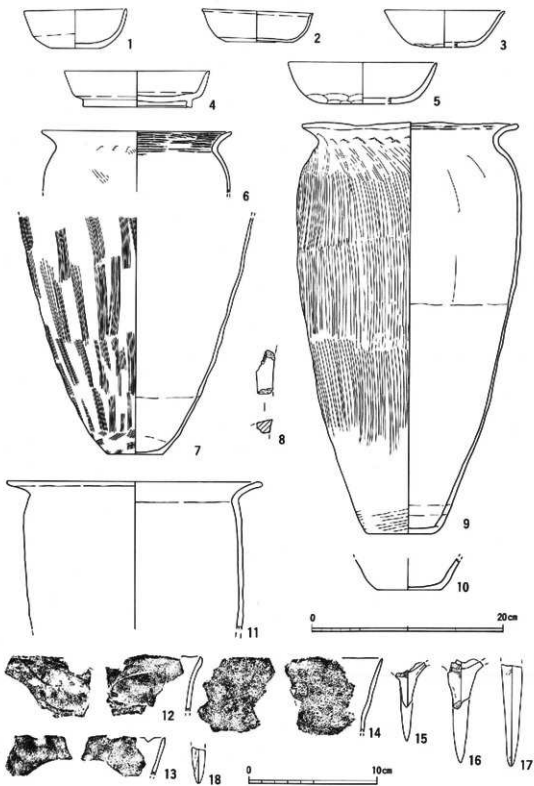


图10 1号竖穴住居跡出土遺物

(2) 3号竪穴住居跡 (図11)

遺構 1号と6号竪穴住居跡と重複しており、北側と西側が残っていない。推定の規模は4mの方形で、深さが約40cmである。柱穴は検出できなかった。かまど自体も残っていないが、南壁の西側のくぼみに他の竪穴住居跡のかまどを築いたと同様の粘質土がわずかに残っており、かまどが築かれていた痕跡を残している。また、北西角に、深さ15cmほどのくぼみがあり、位置から見て柱穴の跡ではないかと思われる。

遺物 1号竪穴住居跡で取り上げた遺物のほかは、1号、3号、6号竪穴住居跡の遺物を

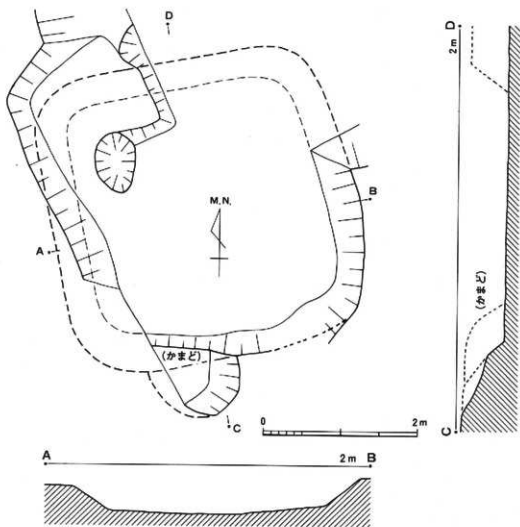


図11 3号竪穴住居跡平面・断面図

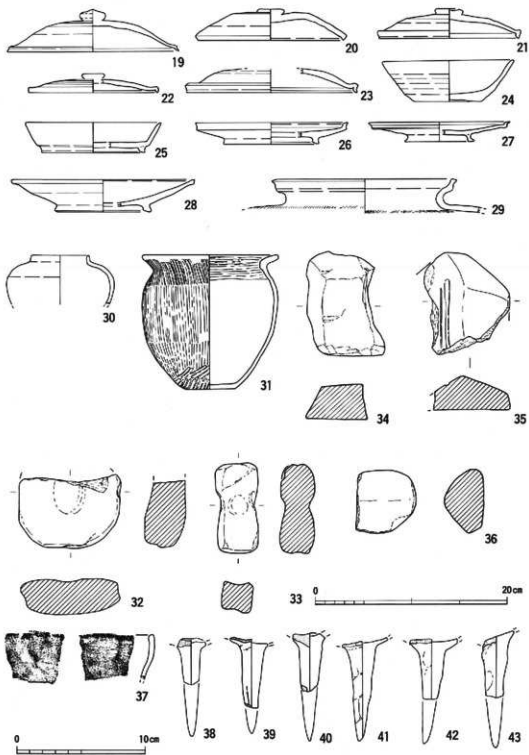


图12 3号·6号竖穴住居跡出土遺物

区分することができなかった。

これらの竪穴住居跡のいずれかに伴うものとして、床面から須恵器の蓋19～23、無台杯24、有台杯25、盤26～28、甕29、短頸壺30、土師器の小型の變形土器31、叩き石32・33、砥石34～36、製埴土器37～43が出土した。

(3) 6号竪穴住居跡 (図13)

遺構 1号と3号竪穴住居跡を検出した後に壁の残存状態から把握した竪穴住居跡で、東と西の角の壁が残存するのみである。規模は、4.2m×4.5mのほぼ方形で、深さは約25cmである。1号と3号竪穴住居跡と重複しており、かまど自体が残存していないことから見て、この3軒の竪穴住居跡の中では最も古く築かれたものと考えられる。

遺物 1号と3号竪穴住居跡を覆う砂と同じ砂が堆積しており、明らかにこの竪穴住居跡に伴うと見られる遺物を検出することができなかった。

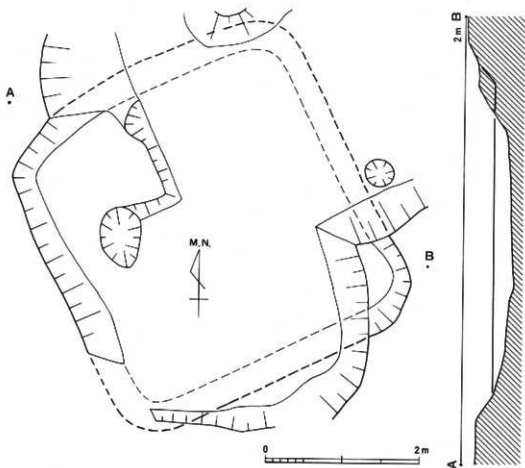


図13 6号竪穴住居跡平面・断面図

(4) 2号竪穴住居跡 (図14・15・16・17)

遺構 5号竪穴住居跡とわずかに重複している。規模は、長辺4m、短辺3m、深さ30cmの長方形の竪穴で、柱穴は検出できなかった。竪穴住居跡の東側の壁の中央にかまどを設けている。かまどは砂質分の多い黄褐色の粘質土で築かれているが、竪穴の床面側に相当崩れてきており、正確な規模や構造は不明である。現存する大きさは、壁側の幅が1.5m、床面側への張り出しが1.3mほどの大きさで、不整の円形をしている。床面からの高さは約20cmである。1号竪穴住居跡のかまどと同様に全体が黄褐色の粘質土で覆われてしまっており、構造については不明確である。かまどの天井がくぼんでおり、ここに煮炊き用の

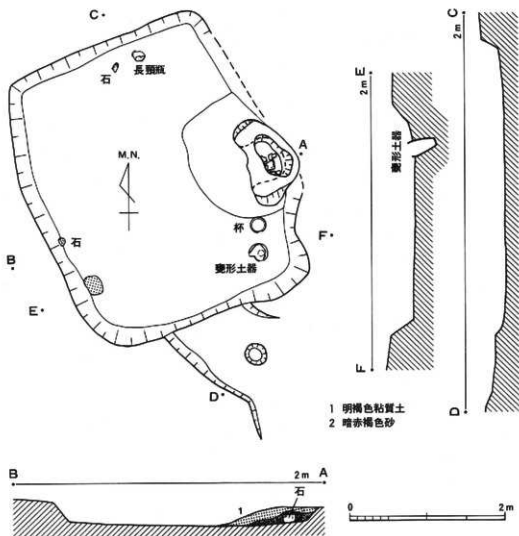


図14 2号竪穴住居跡平面・断面図

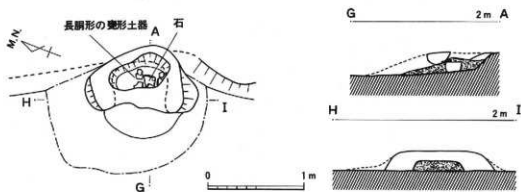


図15 2号竪穴住居跡かまど平面・断面図

長胴形の甕形土器を据え付けていたものと見られる。かまどを立ち割ってみると、中に、炭化物混じりの極暗赤褐色砂が13cmほどの厚みで詰まっており、長胴の甕形土器の底部の破片も出土した。また、甕形土器の下に高さ10cmほどの方形の石が甕形土器の底を支えるように置かれていた。内面は、かまど自体を構築した黄褐色の粘質土も焼けて赤っぽくなっている。この境目を追っていくと、燃焼部は直径約70cmの円形になっている。焚口の幅は不明。かまど自体の壁の厚みは20cmほどとみられる。

かまどの右端に杯56が置かれ、その横の床面に長胴形の甕形土器64が埋けられている。ここに水を入れ、調理などに使ったのであろう。この他、北側壁面近くの床面から長頸瓶59が出土している。それと、拳大の石が数個、床面から見つかっている。

南側壁の中央が出入り口のように、1.2mの幅で18cmほど低くなっている。

遺物 床面から須恵器の無台杯53・54、大甕55、有台杯56・57、盤58、長頸瓶59、床面に据えられた土器の長胴形の甕形土器64のほか62・63・65・66、叩き石60、砥石61、鉄製の刀子44、素焼きの大型の土錘45、製塩土器46～52と拳大の石が数個出土した。

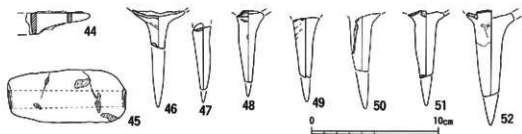


図16 2号竪穴住居跡出土遺物1

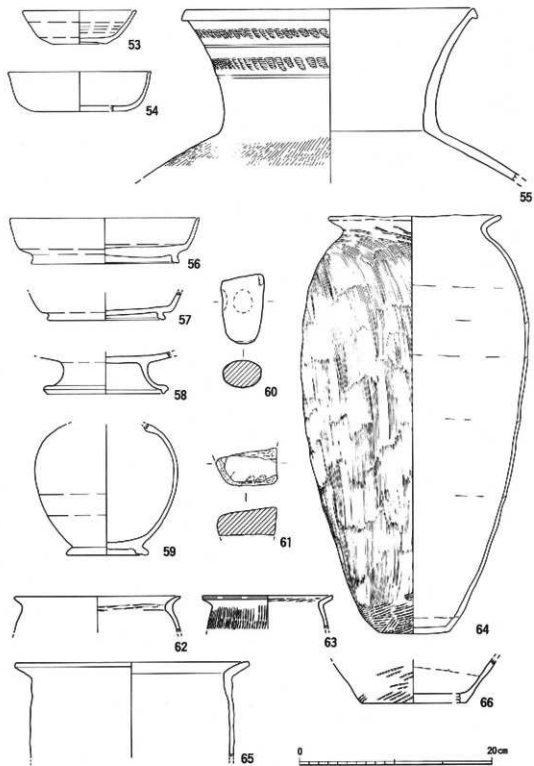


图17 2号竖穴住居跡出土遺物 2

(5) 4号竪穴住居跡 (図18・19)

遺構 南西側の壁が未確認で全体の規模は不明。残存する北東側の長さは推定で3.7m、深さ20cmの竪穴である。柱穴は、東の角で深さ25cmの穴を1個所検出した他は確認できなかった。竪穴住居跡の北西側の壁の中央にかまどを設けている。かまどは砂質分の多い灰褐色の粘質土で築かれているが、竪穴の床面側に相当崩れてきており、正確な規模や構造は不明である。現存する大きさは、壁側の幅が1.4 m 床面側への張り出しが1.4 m ほどの大きさで、不整の円形をしている。床面からの高さは約18cmである。かまどを立ち割ってみると、上面に3cmほどの厚みで灰黄褐色の粘質土が覆い、その下に、炭化物混じりの黒褐色砂と黒色砂が15cmほどの厚みで詰まっている。ここから長胴形の変形土器の底部の破片が底を上に向けてひっくり返った状態で出土した。内面は、かまど自体を構築した灰黄褐色の粘質土も焼けて赤っぽくなっている。この境目を追っていくと、燃焼部は直径約70cmの半円形になっている。かまど自体の壁の厚みは30cmほどである。

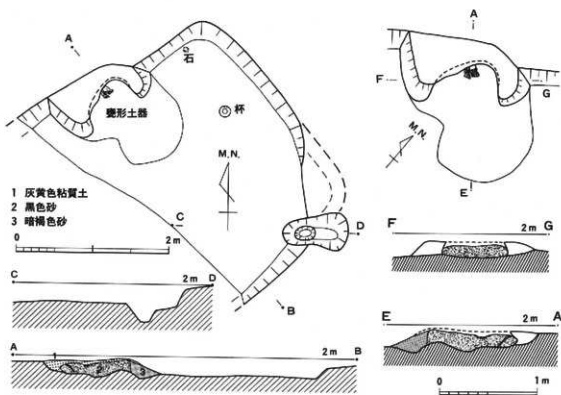


図18 4号竪穴住居跡及びかまど平面・断面図

遺物 かまどの焚口内から土師器の長胴形の変形土器69が出土した。床面からは須恵器の無台杯67と土師器の長胴形の変形土器68が出土した。

(6) 5号竪穴住居跡 (図20)

遺構 2号竪穴住居跡とわずかに重複するものとみられる。東壁しか明確でなく、推定の規模は、長辺3.6m、短辺3.2m、深さ約20cmの小規模の竪穴で、柱穴は検出できなかった。竪穴住居跡の東側の壁の南角にかまどを設けている。かまどは砂質分の多い黄褐色の粘質土で築かれている。残り方が悪く、規模や構造は不明である。現存する大きさは、壁側の幅が1.1m、床面側への張り出しが50cmほどで、床面からの高さは約25cmである。黄褐色の粘質土のかたまりと床面の間に、炭化物混じりの極暗赤褐色砂が薄く広がって露出している。

遺物 床面から須恵器の無台杯70とかまどのすぐ横から砥石71が出土した。

(7) 7号竪穴住居跡 (図21)

遺構 南側角の壁の一部と、かまどが残存するだけの竪穴住居跡であり、規模などは不明である。かまども黄褐色粘質土のかたまりといった状態で残存しており、構造などは不明である。残存する長さは、壁に平行する長さが1.2m、幅が60cm、高さが37cmほどである。かまどを築いた黄褐色粘質土の中には、暗褐色砂が詰まっていた。かまどの焚口側の上に石と須恵器の鉢が置かれており、反対側の東の床面から長胴形の変形土器が出土した。

遺物 かまどに伴ったとみられる土師器の長

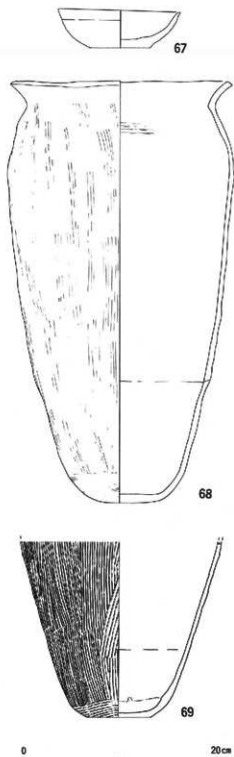


図19 4号竪穴住居跡出土遺物

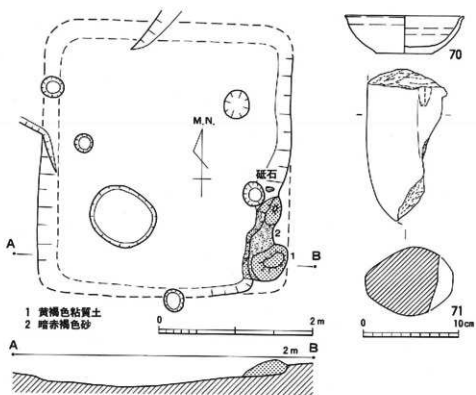


图20 5号竖穴住居跡平面・断面図及び出土遺物

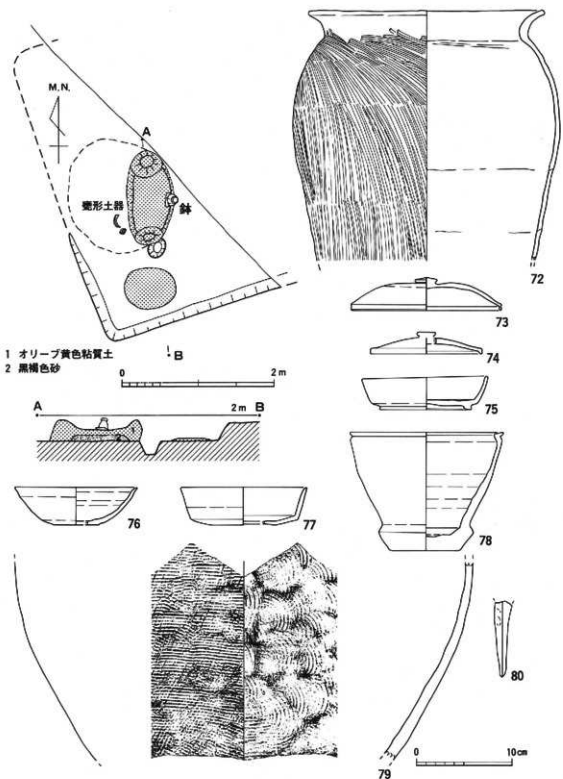


図21 7号竪穴住居跡平面・断面図及び出土遺物

胴形の甕形土器72とかまどの上から須恵器の鉢78が出土した。床面からは、須恵器の蓋73・74、有台杯75、無台杯76・77、大甕79、裂塩土器の台脚80が出土した。

(8) 8号竪穴住居跡 (図22)

遺構 この竪穴住居跡もかまどと竪穴の壁面と考えられる遺構が残存するのみで、規模などは不明である。西側壁の北に赤く焼けた炭化物混じりの粘質土が、壁側の長さ2m以上、内側への張り出しが1.5m、厚み7cmほどの規模で広がっている。この上面に焼けた石や黄褐色粘質土のかたまり、土師器の長胴形の甕形土器があり、かまどであったと考えられるが、構造などは不明である。この面からは他に大きい石や須恵器の杯も出土した。

遺物 赤く焼けた炭化物混じりの粘質土の中に入り込んだ状態で、須恵器の無台杯と土師器の長胴形の甕形土器81が出土した。また、この面からくぼみ石82が出土した。

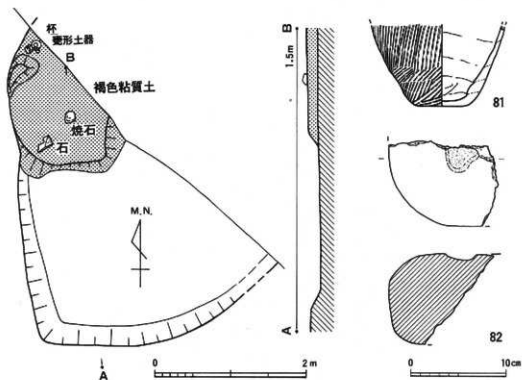


図22 8号竪穴住居跡平面・断面図及び出土遺物

4 掘立柱建物跡と遺物

4区・5区・7区の調査区域で、大小の穴を311か所検出した。これらの穴のうちいくつかは、直径が50cm、深さが50cmの規模をもっており、掘立柱建物の柱を立てた柱穴と見られる。穴を柱穴と想定して、掘立柱建物跡を特定してみると、明確なものとしては、2間の建物を1棟特定できるのみである。

柱穴とみられる穴の数に比べて、建物の特定数が少ないが、調査区域の広さの制約があって明らかにすることができなかった。

特定できた掘立柱建物についてみる。

(1) 1号掘立柱建物跡(図23・24)

この建物は、5区と7区のほぼ中央に位置し、穴93・102・277・151・145・120・224を結ぶものである。

建物の桁行(長さ)は穴93・102・277を結ぶ2間で、梁間(幅)は、145・151・277を結ぶ2間である。柱間は桁行が2.5m、梁間が2.05mである。

(2) 2号掘立柱建物跡(図23・24)

この建物は、1号掘立柱建物のすぐ南に位置し、等間隔で並ぶ穴242・247・133・160から推定したものである。桁行が穴242・247・133・160の3間で、梁間が穴242・257・不明、ないし穴160・162・不明の2間で、穴168が桁行き柱穴と推定できる。柱間は桁行、梁間

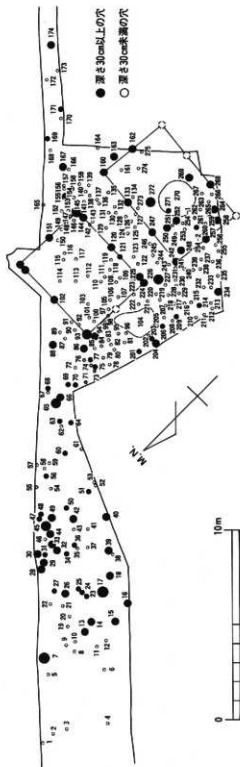


図23 掘立柱建物跡模式図

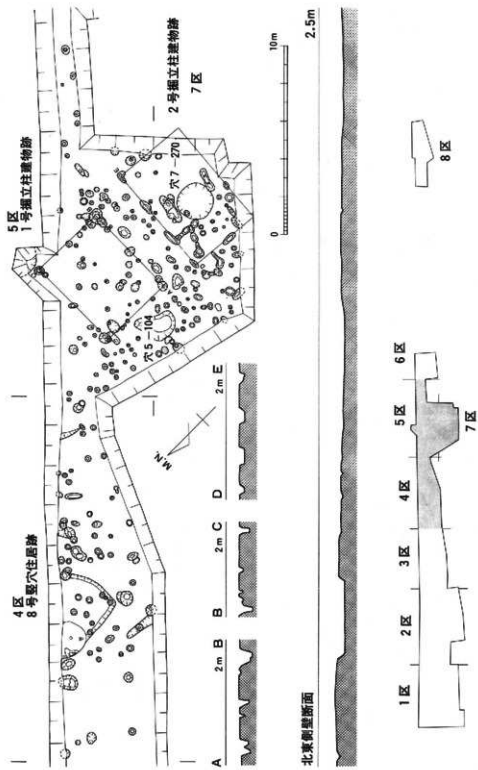


图24 4区・5区・7区透视图

ともに2mである。

1号と2号掘立柱建物の間と、それぞれの建物の西側に、穴の存在が密であり、建物を取り巻いた塀の存在をうかがわせる。

以上の2棟のほか、4区の8号竪穴住居跡の周辺にも掘形のしっかりした穴がいくつか認められ、掘立柱建物が存在した可能性が高い区域である。

これらの、掘立柱建物跡が建てられた時期は、柱穴と想定した穴を掘り込んでいる地山面と同じ面に掘り込まれている穴104から出土した遺物が猿投窯編年の黒笹14号竪式（K-14）の時期のものであり、掘立柱建物もこのころには建てられていたと考えられる。

5 井 戸

1区の中ほどで井戸と考えられる遺構を検出した。

遺構（図25） 2段掘りになっており、上段の掘形は平面形が長径約2.2m、短径約1.8mの楕円形で深さが約35cmである。そのほぼ中央に直径約80cm、深さ約1.1mの穴が掘られている。この2段目は、中ほどから下はほぼ垂直で、その直径は、約50cmである。2段とも素掘りで埴などの仕組みはない。底面に30cmほどの丸い石が置かれていた。

遺構自体を底面まで立ち割ってみたが、現在では、水はまったく湧き出していない。

遺物（図25） 遺物は、井戸の埋積土から2点出土したのみである。

須恵器の蓋83が井戸の2段目に堆積する暗オリーブ灰色砂層の中ほどから出土した。

山茶碗84が1段目に堆積する黄褐色砂層から出土した。

この井戸は、掘形の地山面が竪穴住居と同じであることと、須恵器の蓋83から見て、竪穴住居が営まれていた時期に使用されていたものと考えられる。

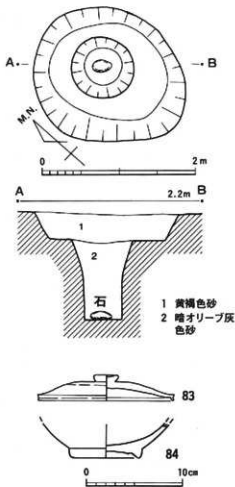


図25 井戸平面・断面及び出土遺物

6 埋葬穴 (図6・26)

2区の3号竪穴住居跡の南壁にかけて埋葬穴を検出した。3号竪穴を検出している段階で骨片が出土し、埋葬穴の存在が分かったもので、埋葬穴のほぼ半分を破壊してしまい掘形の長さは不明で、残存する幅は65cm、深さは20cmである。検出した足の骨のあり方からみて遺骸は頭部を北にして伸展葬の状態に埋葬されたものとみられる。埋葬された時期については、埋葬穴自体に遺物がまったく伴わないので不明であるが、3号竪穴住居跡が廃絶して埋もれてしまった後に掘られたことは確かである。おそらく、周囲に分布する2号貝塚が形成された頃に埋葬されたのであろう。

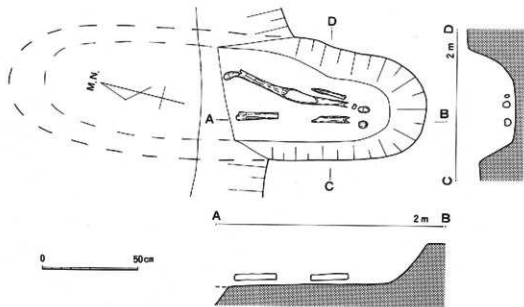


図26 埋葬穴平面・断面図

7 3区の穴 (図7・27)

3区で検出した3カ所の穴についてみる。

遺構 (図7・27) 穴3-1は、長径2.4m・短径1.9mの不整形円形の掘形で残存しており、深さは最も深いところで約25cmである。この穴の埋積土の北側の一部には、他の竪穴住居跡のかまどと同様の灰色粘質土や炭化物層が認められる。遺構の残存状態は不良であるが、これもかまどであったと考えられ、穴3-2あたりまで含めた竪穴住居跡であった可能性が高い遺構である。

穴3-2は、長径1.45m・短径1.1mの楕円形の掘形で残存しており、深さは最も深いところが約25cm、浅いところで10cmほどである。

穴3-3（図7）は、深さ20cmほどのくぼみで、遺構自体の平面形は不明である。

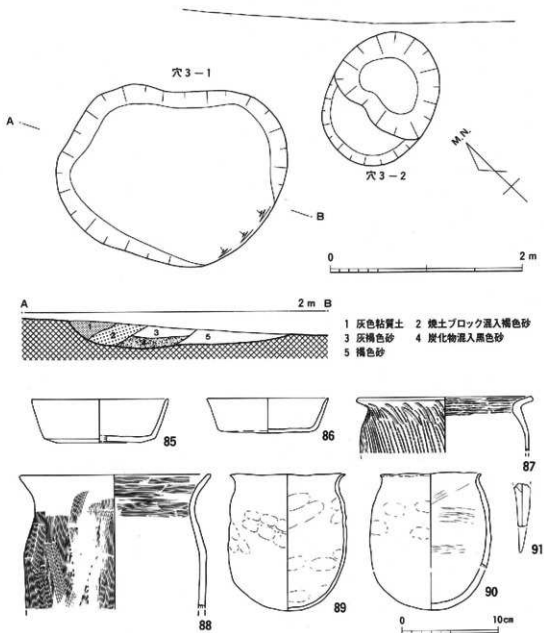


図27 3区穴平面・断面図及び出土遺物

遺物 (図27) 穴3-1のかまど様の遺構から、土師器の長胴形の変形土器の破片が出土した。

穴3-2から、須恵器の無台杯85と土師器の変形土器88が出土した。

穴3-3から、須恵器の無台杯86と土師器の変形土器87、素焼きの丸底変形土器89・90、製塩土器91が出土した。丸底変形土器は土と作り方が製塩土器と同じで、外面に作るときに掌でささえたい指の痕などが残る。また、使用方法も同じであったようで、製塩土器と同じような色調の変化を示し、部分的に黒色、橙色、桃色などに変色している。

8 5区の穴

5区で検出した穴104についてみる。

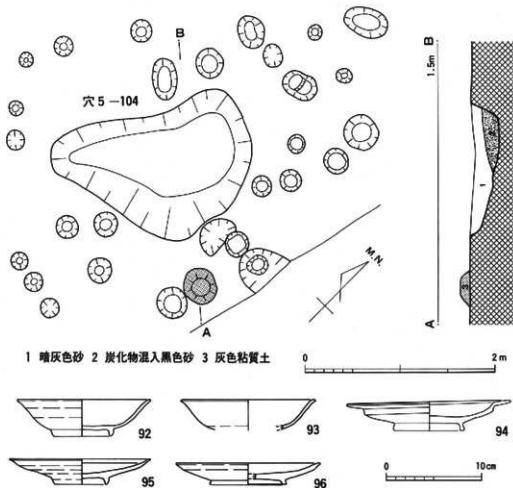


図28 5区・7区穴平面・断面図及び出土遺物

遺構 (図24・28) 穴5-104は、長径2.1m・短径1.7mの不整楕円形の掘形で残存しており、深さは最も深いところで約30cmである。底の一部に炭化物層が堆積している。

遺物 (図28) 穴5-104から、灰釉陶器の碗92・93、段皿94、皿95・96が出土した。これらは、猿投窯編年の黒笹14号窯式 (9世紀後半) の時期の製品と考えられる。

9 貝塚と遺物

遺跡内で小規模な貝塚を三か所検出した。古墳時代 (3号貝塚)、平安時代後期のものと考えられるもの (2号貝塚)、中世 (1号貝塚) の三か所である。

各貝塚を、縦・横30cm×厚み10cmのサイズでブロックサンプリングした。それを1.5mm目のふるいで水洗いし、残った貝殻の種と固体数を調べた。二枚貝類の個体数については左右各殻の最大値を用いた。

その結果は表2に示す通りである。

(1) 1号貝塚 (図6・30)

1区調査区の西角に分布する貝塚で、純貝層の厚みは20cmである。山茶碗や小皿などの出土遺物から見て、中世に形成されている。

遺物 (図29) 小皿97~101、山茶碗102~108、片口鉢109・110、甕111、陶丸112が出土している。これらの遺物は、常滑窯編年区分の第I段階 (12世紀前半) の製品である小皿97と山茶碗102から、第III段階の後半 (14世紀前半) の製品である小皿99~101、高台をつけない山茶碗108まで、相当に幅の広い時期差が認められる。

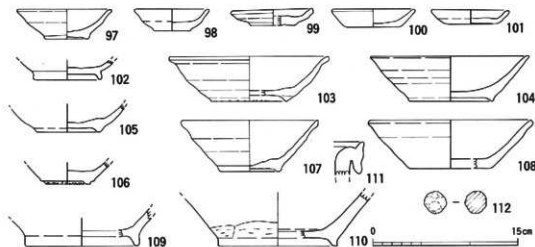


図29 1号貝塚出土遺物

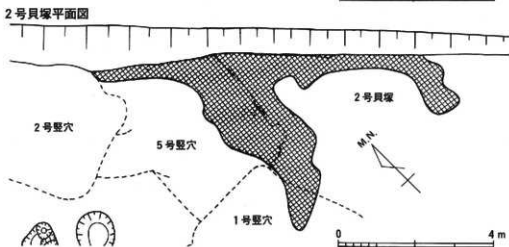
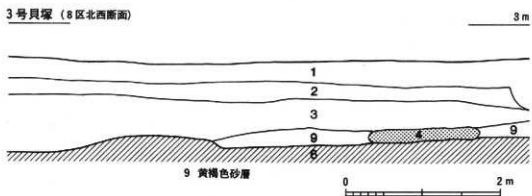
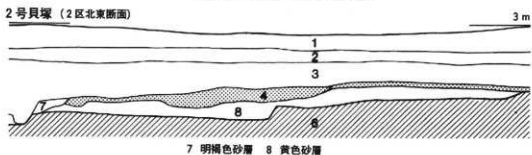
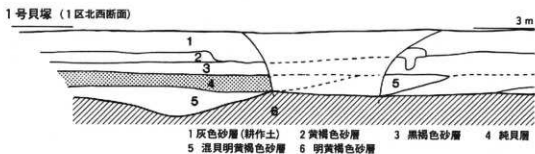


图30 1号·2号·3号貝塚断面·平面图

山茶椀106は、東海地方北部系の製品で、灰白色の緻密な胎土である。

これらのうち、一応、13世紀代のものがまとまりをもっている。

(2) 2号貝塚 (図30)

2区調査区の東角に分布する貝塚で、純貝層の厚みは22cmである。拳大の鉄滓^{てっさい}が数個出土している。貝塚の形成された時期を特定できる遺物は少ないが、周辺から出土する遺物の時期から見て、平安時代後期ころには形成されたものと考えられる。

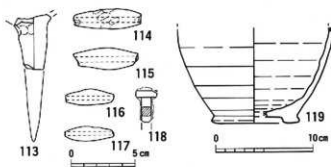


図31 2号貝塚出土遺物

遺物 (図31) 灰釉陶器の長頸瓶119、製塩土器113、素焼きの土錘114~117、鉄釘118、鉄滓^{てっさい}が出土している。

灰釉陶器の長頸瓶119は、猿投窯編年の黒笹90号窯式期 (10世紀前半) あたりの特徴をもつものとみられる。

(3) 3号貝塚 (図7・30)

8区調査区の中央に分布する貝塚で、純貝層の厚みは20cmである。各種の古墳時代の土師器が出土している。

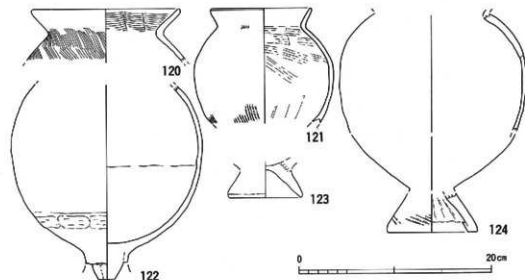


図32 3号貝塚出土遺物 1

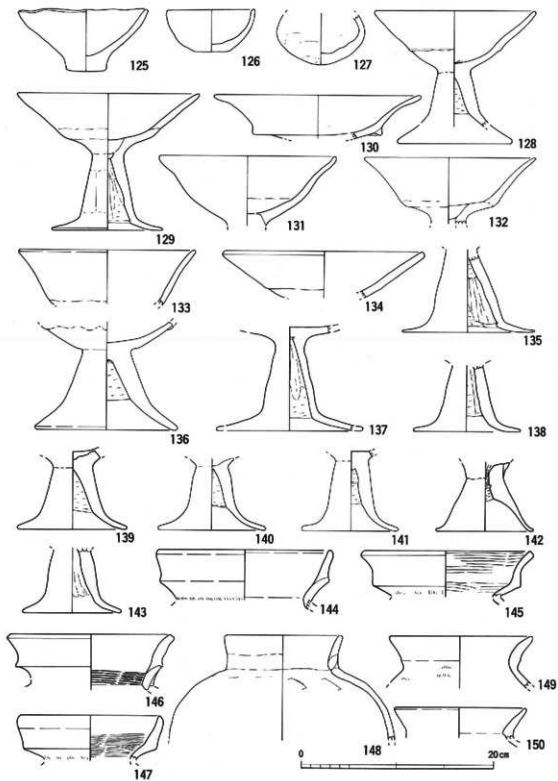


图33 3号貝塚出土遺物 2

遺物 (図32・33) 土師器の甕形土器120・121、台付甕形土器122～124、鉢形土器125・126、小型丸底甕形土器127、高杯形土器128～143、甕形土器144～150が出土している。

台付甕形土器122は、赤褐色の土器で、甕形土器と同様の胎土で表面も丁寧に調整されている。外面にすすが付着しており、煮炊き用の容器として使用されている。底に、成形時に台脚と接合するための突起がつけられている。台付甕形土器124の台脚は、叩き目によって調整されている。

鉢形土器125は、下底面も丁寧に調整している。

高杯形土器130は、斜めに浅くひろがる口縁部と平たい底部との境に、粘土紐を貼りつけて装飾する。129と132は、杯部の底に半球形の粘土を挿入して成形している。高杯形土器の脚は、柱状部と裾部がわずかに屈折してつらなる138～141などと、柱状部に横にひろがる裾部を別につけた129・135・137などがある。

甕形土器は、口縁部が二段に屈折する143～147と、そのまま外側に開く148～159がある。

鉢形土器、高杯形土器、甕形土器の色調は、橙色を主調とするものが多い。

これらの土師器は、形態の特徴から上条期・荒新切期(5世紀)に属するものと思われる。

(1) 橋崎彰一、斎藤孝正「埴坂窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ 愛知県教育委員会 1983

(2) 赤羽一郎『常滑焼』1984

(3) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』47 1968

表2 大木之本遺跡の貝類組成

種名		ブロック		1 区		2 区		8 区	
		個体数	%	個体数	%	個体数	%		
二 枚 貝 類	ハマグリ	65	36.93	453	88.48	20	11.49		
	シオフキ	45	25.57	9	1.76	1	0.57		
	マガキ	20	11.36	3	0.59	75	43.10		
	ヤマトシジミ	9	5.11	—	—	—	—		
	サルボウ	1	0.57	2	0.39	—	—		
	オキシジミ	1	0.57	2	0.39	—	—		
	マテガイ	1	0.57	1	0.20	56	32.18		
	アサリ	1	0.57	—	—	1	0.57		
	オオノガイ	1	0.57	2	0.39	7	4.02		
	イワガキ	1	0.57	—	—	—	—		
小 計		145	82.39	472	92.20	160	91.93		
巻 貝 類	アカニシ	12	6.82	12	2.34	1	0.57		
	ウミニナ	11	6.25	24	4.69	4	2.30		
	イボウミニナ	6	3.41	1	0.20	—	—		
	イボキサゴ	1	0.57	—	—	3	1.72		
	カニモリ類	1	0.57	—	—	—	—		
	ツメタガイ	—	—	3	0.59	6	3.45		
小 計		31	17.62	40	7.82	14	8.04		
計		176	100.01	512	100.02	174	99.97		
陸 産	マイマイ類	6	—	1	—	—	—		
	キセルガイ類	4	—	—	—	—	—		

第4 遺 物

1 弥生時代 (図34)

この時代及び古墳時代の前期に属するとみられる土器の破片がわずかではあるが、調査区の主に8区から出土している。

条痕を施す土器に、深鉢形土器151～155がある。151と152は、器壁が厚く縄文時代晩期のうちに含められる可能性をもつものである。153～155は、貝田町式(Ⅱ期)に属するものとみられる。

壺形土器156は、Ⅱ期後半の獅子懸式(Ⅱ期後半)の特徴をもつ。壺形土器157・158と変形土器159は、元屋敷期(古墳時代前期)に属するものとみられる。

これらの土器の出土区は、変形土器154が3区から出土したほかは、すべて8区からの出土である。変形土器153は、3号貝塚下の地山面に掘られた小穴から出土した。

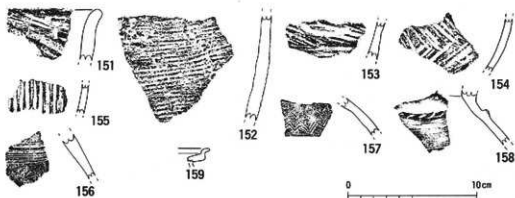


図34 弥生土器・土師器拓影図

2 古墳時代 (図35)

調査区の主に北半部から、古墳時代の須恵器・土師器の破片がわずかに出土している。

須恵器蓋160は、8区から出土したもので、口径が大きく、口縁部の立ち上がりも高い。161は、1区の穴1-9(図6)から土師器の額こしら165とともに出土した。須恵器杯身162・163は、1区から出土した。

土師器の壺形土器164は、2区から出土した。頸部に粘土紐を貼りつけ突帯を作り出し

ている。

時期は、土師器の壺形土器164が、古墳時代前期の元屋敷期とみられる。須恵器は、蓋160がやや古く6世紀代に位置づけられるほかは、7世紀の前半代に属すものである。

3 奈良・平安時代

(1) 須恵器 (図36・37)

須恵器は、主に1区から5・7区にかけての遺物包含層(図4-3層・4層)と地山面から出土しており、特に堅穴住居跡のある2区と3区が密である。6区・8区方面からの出土は稀薄で、この方面の須恵器で作図できたものは、有台杯196のみである。

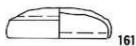
器種としては、蓋166~174、無台杯の底部から直接体部が斜めに直線的のびるもの175~177、無台杯の底部から一度わずかに立ち上がらせて体部へいたるもの178~183、無台杯の底部からやや丸みをもって体部が斜めにのびるもの184~193、有台杯の深さの浅いもの194~196、深いもの197~200、短頸壺201~203、甕204・205、鉢206、台付円面硯207、盤208~212、長頸瓶213・214、瓶蓋215がある。

無台杯177と191に墨書がある。杯177は3区の3層から出土したもので、「生」とみられる一文字が書かれている。杯191は、1区北端の地山から出土したもので、「太」とみられる一文字が書かれている。

台付円面硯207は、3区の穴が分布する地域の地山面から出土した。普通の円い台をそ



160



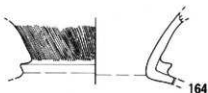
161



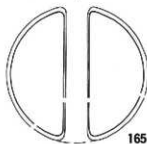
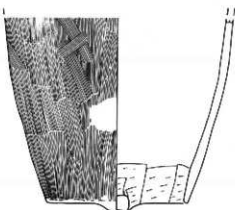
162



163



164



165



図35 古墳時代の須恵器・土師器

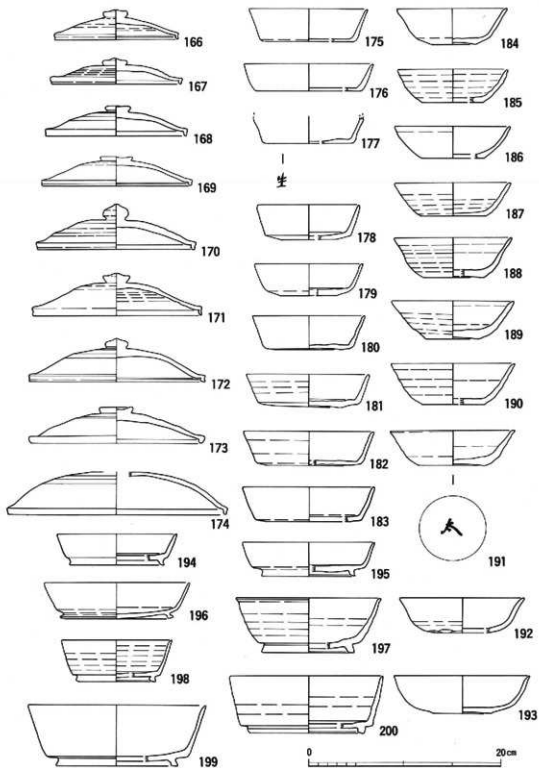


図36 奈良・平安時代の須恵器 1

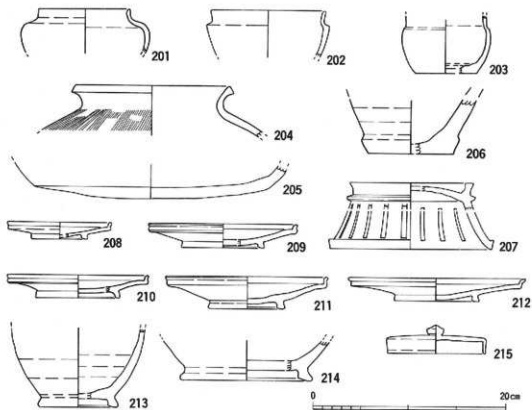


図37 奈良・平安時代の須恵器 2

なえた圈足に長方形の透かし孔をあけたものである。この時期の硯としては、知多半島地域では初めて出土した遺物である。

これらの須恵器は、明確に時期区分のできる器種はないが、猿投窯編年のIV期（8世紀後半から9世紀中頃）に位置づけられる岩崎25号窯式（I-25）・鳴海32号窯式（NN-32）・折戸10号窯式（O-10）・井ヶ谷78号窯式（IG-78）に属するものとみられ、鳴海32号窯式（8世紀後半）以後が主体を成している。

竪穴住居跡の須恵器もこれらと同じ時期のものともみられる。

(2) 土師器 (図38)

須恵器と同様の出土状態を示し、調査区の北半分から多く出土し、そのほとんどが甍形土器である。

甍形土器216は、荒くて深い刷毛目調整を施す。甍形土器219・220は、長胴形をなすものである。222・223は、小型の甍形土器で、外面にすずが付着し、煮炊きによく使用された状態を示している。

丸底甕形土器224は、2号貝塚下の地山面から出土した。遺構の穴3-3から出土したものと同様、製塩土器と同じ作りで色調も変化している。

これらの土師器の時期は、須恵器と同時期のものとみられる。

(3) 灰釉陶器 (図39)

須恵器と同様の出土状態を示し、調査区の北半分から出土する。

器種としては、蓋225、長頸瓶226～230、壺231、椀232～236、皿237～242、陰刻花文稜皿243、段皿244・245がある。

蓋225・長頸瓶226・227

は、須恵器のような暗灰色の色調であり、猿投窯編年の折戸10号窯式期（9世紀前半）のものとみられる。

長頸瓶228～230は、灰白色の色調である。

椀239の底面には、へらによって記号が書かれている。陰刻花文稜皿243は、4個の破片しかないが、それぞれの破片に描かれた文様を展開していくと、掲げた図のような花文が復元できる(図版33参照)。内面の口縁に細いへら描きで4か所花文を、見込に圈線をめぐらしてその回りにも花文を描いている。全体に丁寧な作りで、高台の断面は四角い。

これらの灰釉陶器の多くは、器形の特徴からみて投窯編年の黒笹90号窯式期（10世紀前半）のものとみられる。椀235・236は、器形の特徴からみて、次期の折戸53号窯式期（10世紀後半）の製品とみられる。

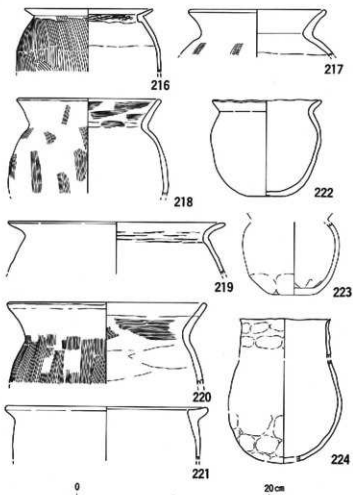


図38 奈良・平安時代の土師器

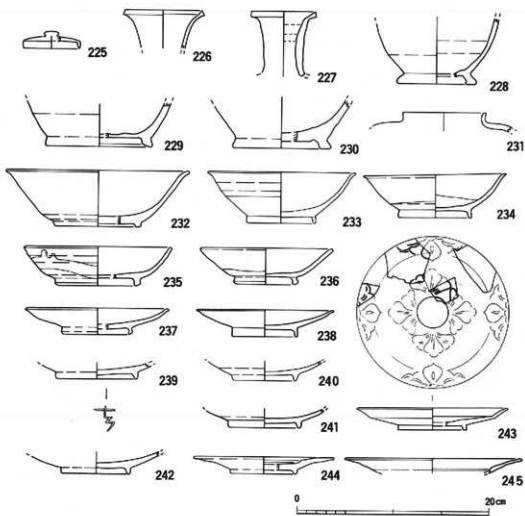


図39 奈良・平安時代の灰釉陶器

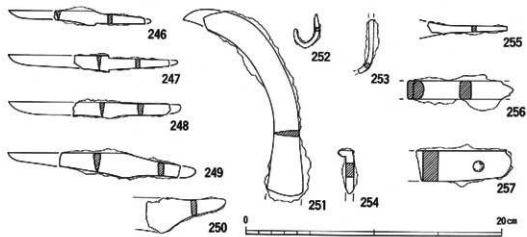


図40 奈良・平安時代の鉄製品

(4) 鉄製品 (図40)

刀子246～250、鎌251、釣針252・253、釘254、鋸255、用途不明256・257、錆化して形態のまったく分らないものなどが、調査区の北半分から出土している。

用途不明の257は、一方の端の中央に丸いくぼみを設けている。

これらの鉄製品は、出土状態からみて、主として須恵器と同じ時期のものと考えられる。

(5) 石器 (図41)

2区と3区から叩き石258と砥石259～262が出土している。叩き石258は、偏平な面の両側に叩いた跡のくぼみがみられる。砥石259は、四面とも研ぎ面として使用されており、同じく四面ともに二個の対をなすくぼみが残っており、叩き石としても用いられている。砥石260には、細い溝状の研ぎ跡がみられる。

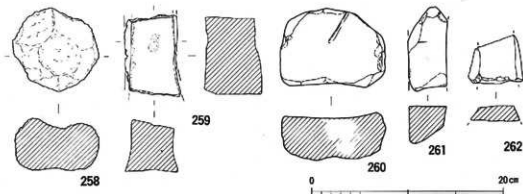


図41 奈良・平安時代の石器

(6) 土 鍾 (図42)

調査区のほぼ全域から出土しており、特に3区・4区・5区からの出土が多い。

孔径2mm・長さ3.4cm・太さ1cmの264の小さいものから、孔径が1.4cmの大きなものなど各種の土鍾がある。

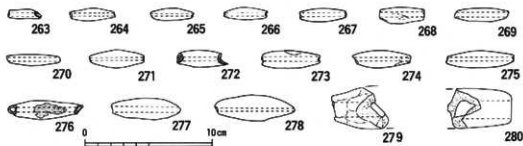


図42 奈良・平安時代の土鍾

(7) 製塩土器 (図43)

製塩土器が調査区のほぼ全域から出土している。

口縁部281・282は知多式製塩土器4類で、5号竪穴住居跡に伴って出土したものである。先の尖った角形の棒状の台脚283~312は、知多式製塩土器4類である。313は、胎土に砂が多い。粗雑な作りの台脚314~318は、2区の3号・6号竪穴住居跡の埋積土から出土したもので、胎土に砂が多く、知多式製塩土器5類である。

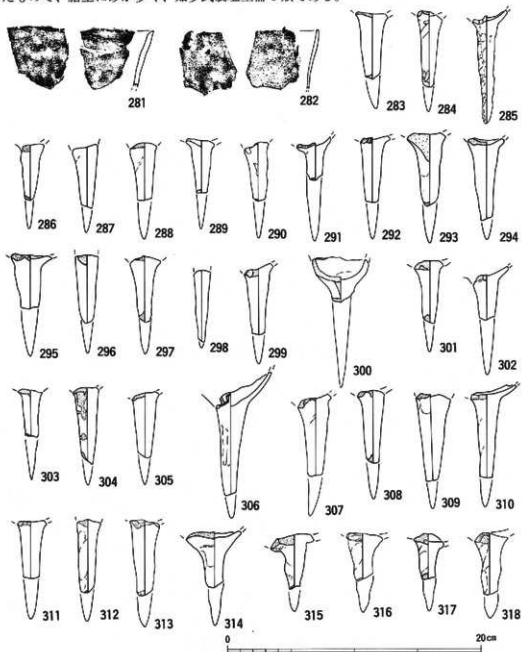


図43 奈良・平安時代の製塩土器

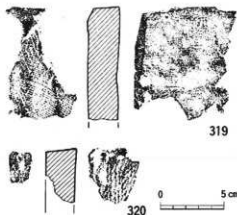


図44 奈良・平安時代の瓦

調査区の2区と3区の3層から平瓦の破片が3個ほど出土している。平瓦319は、凹面に布目跡がみられ、凸面は、へら削りで仕上げている。平瓦320は、凹面に布目跡がみられ、凸面は、縄目の叩きを加えている。ともに、厚みは2.3cmである。

(8) 瓦 (図43)

調査区の2区と3区の3層から平瓦の破片が3個ほど出土している。

平瓦319は、凹面に布目跡がみられ、凸面は、へら削りで仕上げている。平瓦320は、凹面に布目跡がみられ、凸面は、縄目の叩きを加えている。ともに、厚みは2.3cmである。

(9) 銭貨 (図版36)

銅貨が3枚出土している。

熙寧元宝 (初鑄・1068)、直径2.5cm、中央の方形の透かし穴6.5mm。元豊通宝 (初鑄・1078

4 中世以降の遺物

中世陶器の山茶碗325～329、小皿330～352、短頸壺353、片口鉢354、硯356、甕357陶丸321～323などが、主に調査区の北半分から出土している。

陶丸321は、四面に小さいくぼみを加えている。陶丸322・323は、全体がよく磨り減って真ん丸になっている。324は、甕の胴部片を打ち欠いて円盤を作り出したものである。

素焼きの土器として、口縁部を内側に折り曲げた変形土器360・361 や手づくねの皿363・364が出土している。

このほか、中国製の青磁碗359などが3点ほど出土している。

近世の遺物としては、天目茶碗362や灰釉のおろし皿358、鉢355などが出土している。

中世以降の遺物は、山茶碗や小皿などにみられるように12・13世紀にまとまりをもつのみで、その他の時代の遺物の出土は稀薄になってくる。

遺物の出土状態からみると、14世紀以降、居住の場が変化していったことを示している。

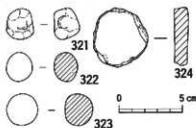


図45 中世以降の出土遺物 1

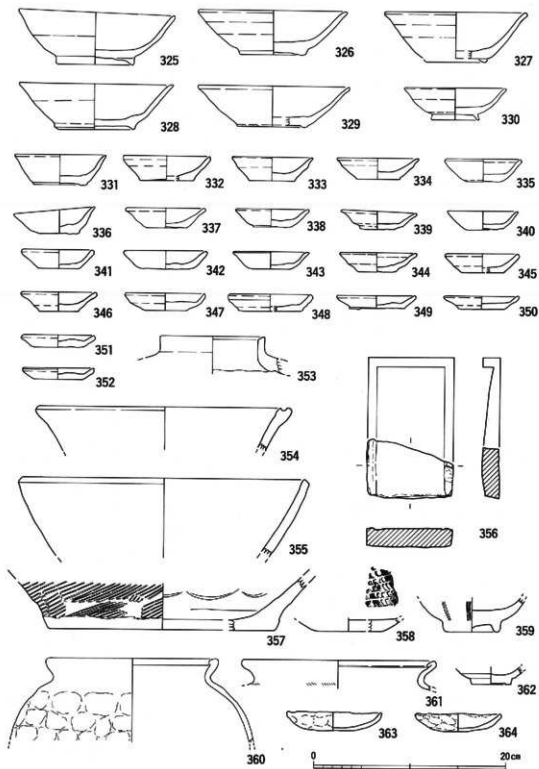


図46 中世以降の出土遺物

第5 ま と め

集落の変遷 今回の発掘調査で検出した、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡と掘立柱建物跡は、知多地方では、はじめての発見である。海岸線の砂堆上からは、縄文時代晩期以降の各時代の遺物が発見されており、生活が営まれていたことが分かる。ただ、こうした地域は、現代に連なる集落が営まれているところであるため、面として広がりをもつ発掘調査が行われていないことと、発掘調査された場所も砂地であるために遺構が残りにくいことが、その検出を妨げてきた。

今回の調査区域は、そうした意味では大変恵まれたところであり、住居跡の遺構を検出することができた。ただ、道路用地内ということで、遺跡の広がりを調査することができなかった。わずかな検出遺構ではあるが、主として、住居の変遷についてまとめておきたい。

竪穴住居跡を8軒検出したが、このほかにも、おそらく竪穴住居跡であったのではないかと考えられる箇所が二つほど認められる。前節「3区の穴」で触れた場所のほかに、1区の7号竪穴住居跡の南西に、竪穴住居跡のかまどの痕跡を残す場所がある。仮にこれらも含めるとすると、調査区域内で10軒の竪穴住居跡が存在したことになる。ここでは、一応、遺構としての竪穴を検出できた住居跡についてみる。

8軒の竪穴住居跡の営まれた時期については、伴出遺物からみて猿投窯編年の鳴海32号窯式(NN-32)から折戸10号窯式(O-10)に属するものとみられ、8世紀の後半から9世紀の前半にかけてを中心とし、ざっと50～60年の幅をもっている。さらに詳細な時期区分を検討しなければならないが、伴出遺物の主体が杯や蓋の類いでは、これ以上の区分は難しい。

個々の竪穴住居跡の前後関係についてみると、重複する1号竪穴住居跡から3号竪穴住居跡と5号・6号竪穴住居跡については、竪穴の掘形からその前後関係をつかむことはできなかった。これらのうち、重複関係から同時に存在できた竪穴住居跡の可能性を考えてみると、1号あるいは3号か6号と2号の2軒、あるいは、5号と3号か6号の2軒であり、多くても2軒であったことが分かる。この2軒に、他の竪穴住居跡と重複しない4号・7号・8号竪穴住居跡を加えると最高で5軒になる。しかし、竪穴住居跡の営まれた時期に幅があることを考えると、実際はもっと少なかったであろう。

竪穴住居跡分布の広がりをみると、8号が4号の所在する区域より約23mほど離れている。この間に存在する3区の穴が竪穴住居跡だとすると、それぞれ約12mの間隔となる。

調査できた区域が面としての広がりをもっていないので、こうしたデータからでは、竪穴住居跡群の広がりを追及することはできないが、同時期に存在したと考えられる井戸と8号竪穴住居跡との直線距離は、約54mである。

これらの竪穴住居跡に住んだ人の数を推定してみる。1号竪穴住居跡の床面積が約12.3㎡、そこからかまどの面積約1.7㎡を差し引き、一人当たりの居住に必要な面積を3㎡として残りの床面積を割ってみると、3.5人になる。2号竪穴住居跡も同じ様に導き出してみると2.9人になる。一人当たりの居住に必要な面積をもう少し少なく見積もっても四、五人ほどである。これらの竪穴住居跡に住んだ人びとの家族構成は、現代の核家族のように両親と子ども二人ほどで、間仕切りのない家の中で、床にわらかむしろを敷いて仲良く暮らしていたことであろう。

この村からは、9世紀のはじめころのものとみられる円面碗が出土した。この集落に字を読み書きする人がいたことが確かめられたのである。ここから出土した杯の底に書かれた「太」や「生」の墨書は、何を意味するのか分からないが、他からもってこられたものではなく、この竪穴住居に生活した人が書いたものであろう。

次に、これらの竪穴住居跡群の南東に分布する掘立柱建物群についてみてみる。掘立柱建物が営まれた時期については、竪穴住居跡のように時期を特定できる遺物がないため、明確ではない。ただ、建物は特定できないが、掘立柱建物群を構成するとみられる柱穴跡が8号竪穴住居跡の上にも設けられていることからみて、少なくとも8号竪穴住居跡が廃絶した後に掘立柱建物群が設けられたものと考えられる。その時期は、掘立柱建物群周辺から出土する遺物が猿投窯編年の黒笹14号窯式(K-14)に属すものとみられることから、9世紀の後半には、建てられていたのではないかと思われる。

一応、特定しえた建物としては、柱と柱の間を1間と数えて、1号掘立柱建物とした2間×2間のものと、2号掘立柱建物とした3間×2間のものがある。一般的にみて、1号掘立柱建物は方形であることから、倉庫である可能性が高い。長方形の2号掘立柱建物は村人の住居であった可能性が高い。これらの掘立柱建物群の廃絶した時期は、建物の柱穴の中に堆積する砂の中に、山茶碗の破片が混じっていることからみて、平安時代も後期の12世紀ころには廃絶していたと考えられる。

それ以後、山茶碗や貝塚など中世の時期の遺物・遺構も出土しているが、これに伴う住居は認められない。中世の居住域は、現在集落が形成されている北の地域に、移動していたものとみられる。

付載 留木第8号窯発掘調査報告

第1 位 置

留木第8号窯の地籍は、愛知県東海市加木屋町留木48番地の4と6に属する。地理的な位置としては、知多半島の伊勢湾側の北部に位置する東海市の南端に近く、伊勢湾に注ぐ横須賀新川の上流にある鎌ヶ谷池をめぐる東側の丘陵末端に近い場所にある。この丘陵は、標高50mほどで、鎌ヶ谷池の南にのびる丘陵との間に10基以上の古窯が分布しており、知多半島の古窯跡のなかの鎌ヶ谷古窯跡群として知られている地域である。

知多半島の骨格をなす知多丘陵北部においては、本古窯跡群をはじめとして、数百基の古窯が存在し、平安時代末から鎌倉時代にかけての瓦陶兼業窯である社山古窯、権現山古窯（東海市加木屋町）、吉田古窯（大府市吉田町）なども営まれている。

本古窯は、丘陵を切り開いてS字状に南北に走る市道小清水雫子野線南側の丘陵端の西に位置しており、標高は約35mである。すぐ南に広がる水田との比高は10mほどである。

本古窯の北に8基ほど古窯が分布している。これらの古窯群のうち、最も古いものは、表採資料からみて12世紀前半に位置づけられる。

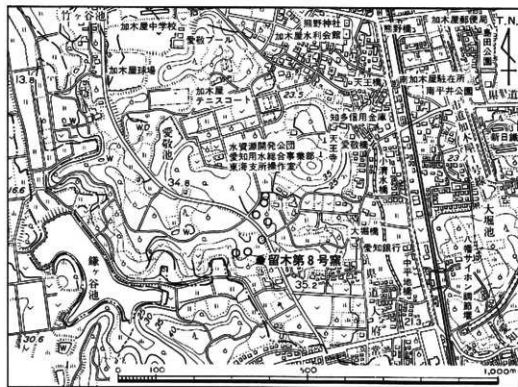


図1 留木第8号窯周辺地形図

第2 調査の経緯

昭和58年6月に、本市加木屋町留木の丘陵裾の土取り作業中に、たくさんの焼物が出てきたと、市の農務課へ地主から連絡があった。農務課から教育委員会の社会教育課へ連絡が入り、すぐに現場の調査に向かった。土取り現場は、丘陵裾の両側の端で、そこには、山茶碗・小皿・片口鉢が散乱しており、土取りの場所が古窯の灰原にかかったものとみられた。その東の土取り跡の断面に、分焰柱のみが残っており、これに伴う窯体自体はすでに滅失しているようであった。地主によれば、この窯体周辺の土取りは今回の土取りより数年前に実施し、他の畑に土砂を運んだとのことであった。

まだ、土を取って水田などへ運ぶ予定であったため、とりあえず作業を中止するよう依頼した。そして、今度たくさん発見された焼物は、文化財保護法によって埋蔵文化財として保護していかなければならず、もし、工事を続けるならば、発掘調査を行って記録保存をしなければならない旨を伝えた。急ぐ作業でもないので、とりあえず中止することについては、了解を得たが、土取りの作業自体までは、中止できないとのことであったので、発掘調査を実施することになった。県の教育委員会文化財課と連絡を取りつつ、市の教育委員会が発掘主体者となり、発掘調査を実施した。

調査は、6月22日から7月26日までを要したが、その間、周辺に数基の古窯が存在していることが分かった。これらをすべて調査すると時間と経費が相当なものになること、焼物の破片が大量に混ざった土では、水田の埋め立てには不都合であることなどから、最終的に土取り作業自体が中止されることになった。実際の発掘調査は、この判断が下された時点で取り止めた。その後、すでに発掘した区域の実測作業などを行って調査を終了した。

発掘した区域としては、以下の節で詳述するように、遺構として残存していた分焰柱と焚口の周辺と灰原に、一か所設定したトレンチのみである。それでも遺物の量は、プラスチックの箱に200箱ほどあり、その大半は、土取り現場に散乱していたものである。

調査組織は、次のとおりである。

調査主体	東海市教育委員会
調査担当者	立松 彰（東海市立平洲記念館）
調査補助員	片山武史・近藤直樹（東海市教育委員会社会教育課）
発掘作業員	加古泰子・加古まさみ・新海久子・北川すぎ子・蟹江良子・深川てつ子 加古絹子・久野とめ子・加古ヨシエ・加古ふみ子
調査協力	加古弘充・合資会社八島建設

第3 遺 構

窯体のうち、分焰柱から先の焼成室と煙道部については、すでに破壊されており全く残存していない。窯体で残存するのは、分焰柱から下方の燃焼室・焚口のみで、それに、窯に伴う前庭部・灰原方面が残っている。

分焰柱が設けられた場所の床面の幅は1.7mで、そのほぼ中央に直径約60cmの分焰柱が立てられており、その左右の通焰孔の幅は約55cmである。窯壁は床面からやや丸みをもって立上がり天井に至るが、その高さは不明である。分焰柱自体は、70cmほどの高さまで残存している。

窯体の傾斜は、焼成室から分焰柱を通り過ぎ、窯の平面形が燃焼室のところで膨らみをもちはじめるところでおわり、そこから焚口にかけては平坦になる。この床面の傾斜が終り、平坦になる箇所幅は約1.1mで、この幅が1.3mほど連なり焚口に至る。この間の窯壁はやや膨らみをもって立ち上がる。

燃焼室の床面には、炭化物の層が踏み固められたようになって約30cmも堆積しており、その上面に山茶碗などの遺物が散乱している。この炭化物の層は、厚さが薄くなるが、前庭部一帯にも広がっている。

前庭部には、大小の穴が設けられている。まず、焚口の（分焰柱に向かって）すぐ右側に、長径1.2m、短径0.7m、深さ10cmほどの楕円形の穴（穴1）があり、その西後ろに直径2m、深さ30cmの大きな穴（穴2）がある。焚口の左側は20cmほど高くなっており、その西後ろに全形は不明だが幅1.7m、深さ20cmほどの穴（穴3）が設けられている。焚口から穴3と穴2辺りまでの約3mの広さが平坦で、ここから、西に向かって傾斜し、灰原となっている。

分焰柱は、当初は地山を掘り残して設けられていたものとみられるが、最終的には、補修を加えていた。分焰柱の当初に地山を掘り残して設けられていたとみられる直径は55cmで、

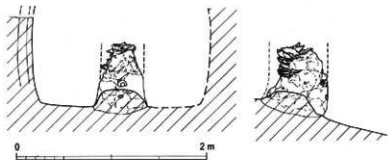


図2 留木第8号窯分焰柱正面・側面図

高さ18cmほどが残存している。最終的には、まず焚口側に直径4cmの真っ直ぐな木を立て、この棒を支えにして、残存する地山の上に窯壁と一緒のすざ混じりの粘土を置き、片口鉢が4個粘着したものを置き、さらに粘土を加え、片口鉢が8個粘着したものを置き、また粘土を加えて、片口鉢が6個粘着したものを置いている。支えにした棒の燃焼室側には、さらに、下から粘着した山茶碗のかたまりを底部を外側にして粘土で覆っている。粘着した山茶碗のかたまりは、3段が確認でき、下から2枚粘着したもの、5枚粘着したもの、4枚粘着したものを添えている。分焰柱の天井までの高さは、不明であるが、このようにして、中心に片口鉢を連ね、燃焼室側の面に山茶碗を当てて柱全体を形作っていたものとみられる。これらの片口鉢や山茶碗は、遺物の項で詳しく触れるが、この窯で焼かれたものと同形態である。

前庭部の北側の斜面の高い位置に、炭化物層があり、別の古窯が存在している。

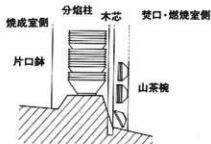


図3 分焰柱構造模式図

表 留木第8号窯断面図土層説明

番号	説	明
1	表土：暗灰色土	
2	黄色土（均質）	
3	褐色粘質土（均質）：遺物を含む	
4	炭化物：遺物を含む－別の古窯の層	
5	赤褐色粘質土：細かい赤色の焼土・炭化物と遺物を含む	
6	灰色土：細かい赤色の焼土・炭化物と遺物を含む	
7	灰褐色砂質土：細かい赤色の焼土と遺物を含む	
8	黒色土：炭化物を多く含む・遺物を含む	
9	黒褐色土：炭化物を多く含む・遺物を含む	
10	褐色の焼土ブロックを多く含む・遺物を含む	
11	赤色の焼土ブロックを多く含む・遺物を含む	
12	灰色土：焼台を含めた遺物を多く含む	
13	灰褐色土：焼台を含めた遺物を多く含む	
14	山茶碗と小皿が堆積する	
15	褐色粘質土：山茶碗と小皿が堆積する	
16	暗褐色土：砂の粒子が荒い・遺物を含む－別の古窯の層	
17	黒褐色砂質土：炭化物を多く含む・遺物を含む－別の古窯の層	
18	暗褐色土：砂の粒子が細かい・遺物を含む－別の古窯の層	
19	黄褐色粘質土・遺物を含む－別の古窯の層	
20	黄色粘質土・遺物を含む－別の古窯の層	
21	暗褐色土・炭化物を多く含む・遺物を含む	
22	褐色土：遺物を含む	
23	黄褐色砂質土：地山と同じ土層で掘り返している	
24	黒色土：細かい赤色の焼土ブロックと炭化物を多く含む	
25	黄褐色粘質土	
26	黒色土：細かい赤色の焼土ブロックと炭化物を多く含む・遺物を含む	

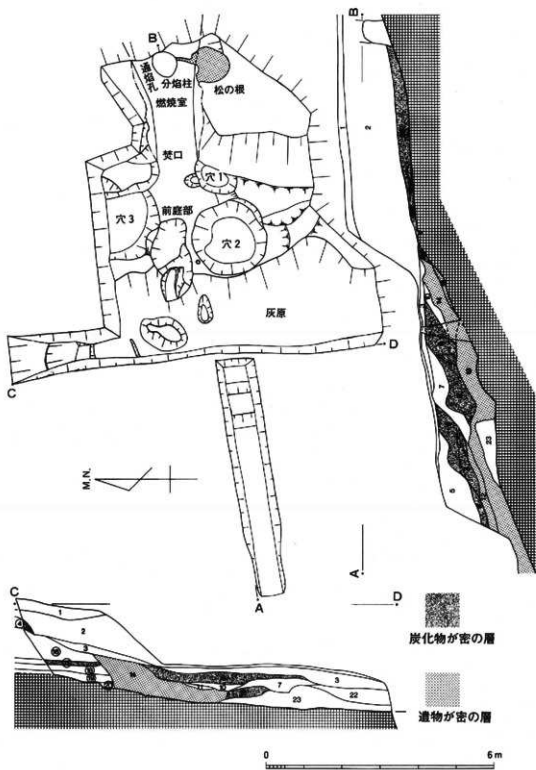


図4 留木第8号窯平面・土層断面図

第4 遺 物

1 山茶椀

体部の腰部に丸みをもつものと腰部に張りがなく直線的に広がるものの違いや口径、高台径、高さの差から次のように分類できる。

A類 (図5・6-1~52)

口径(器の最大幅)が16cm、高台径(高台の先端の幅)が7~8cm、高さが4.5~5cmほどの大きさで、口径、高台径が大きい割に浅い形状である。体部は腰部に丸みを残し、口縁部はわずかに外反する。底面は糸切りのままで、高台端部の榫殺痕が明瞭である。高台端部に砂痕が残るものもあり、高台の付け方は丁寧である。

B類 (図8-103~116)

口径が13.7cm、高台径が5.7cm、高さ5.3cm前後の大きさで、口径が小さくて深い形状である。体部は腰部にわずかに丸みを残す。口部外側を強く押さえ、口縁部を厚く整形し、端部を平坦に仕上げる。底面は糸切りのままで、高台端部の榫殺痕が明瞭である。

C類 (図9-171~200・図10-201~230)

口径が14.6cm、高さ5.2cm前後の大きさで、口径が大きい割に浅い形状である。体部は腰部にわずかに丸みを残し、口縁部をわずかに外反させるものもある。底面は糸切りのままで、高台端部の榫殺痕が明瞭である。

高台径の大きさに、5.5cm(171~200-D1類)と6.1cm(201~230-D2類)前後のものがある。

D類 (図11-274~291・図12-292~324・図13-325~334)

口径が14.7cm、高台径が6.0cm、高さ4.7cm前後の大きさで、体部の腰部に張りがなく直線的に広がる形状である。口縁端部を面取りして平坦に仕上げる。底面は糸切りのままで、高台端部の榫殺痕が明瞭である。

E類 (図14-383~412・図15-413~442)

口径が15.1cm、高さ5.2cm前後の大きさで、体部の腰部に張りがなく直線的に広がる形状で、口縁端部を面取りして平坦に仕上げる。基本的にD類と同じ形状であるが、それより口径が大きく高いものである。底面は糸切りのままで、高台端部の榫殺痕が明瞭である。高台の大きさに、5.3cmと小さいもの(383~392-E1類)と6.1cmと大きいもの(393~442-E2類)がある。

底面は糸切りのままで、高台端部の榫殺痕が明瞭である。

F類 (図16-443 ~454)

口径が14.3cm、高台径が6.1cm、高さ5.5cm前後の大きさで、体部の腰部に張りがなく直線的に広がる形状で、口径が小さくて深い形状である。底面は糸切りのままで、高台端部の縁設痕、砂痕が明瞭である。

G類 (図16-455 ~472)

高台を付けないもの。体部は腰部にわずかに丸みを残すものや腰部に張りがなく直線的に広がる形状のものなどがある。底面は糸切りのままである。

2 小皿

形状と口径、高台径、深さの違いと山茶碗とのセット関係から次のように分類できる。

a類 (図6-53~66)

口径8.1cm、底径4cm、高さ2.2cm前後の大きさで、平底であるが、台部を意識してわずかに突出させる形状である。底面は糸切りのままである。

b類 (図8-117~170)

口径8.2cm、底径4.5cm、高さ1.6cm前後の大きさで、糸切りで切り離した底面と体部の立上がりの屈折が明瞭な形状である。底部をわずかに突出させるものもある。

c類 (図11-231~273)

口径8.6cm、底径4.9cm、高さ1.9cm前後の大きさで、糸切りで切り離した底面と体部の立上がりの屈折が明瞭な形状である。

d類 (図13-335~376)

口径8.7cm、底径5.2cm、高さ1.7cm前後の大きさで、全体の形としては、糸切りで切り離した底面と体部の立上がりの屈折が不明瞭な形状であるが、糸切りした底面の円形自体は明瞭である。

e類 (図17-473~566・図18-567~596)

全体に浅い形状で、底部の糸切りの痕自体が体部の腰部にかかり、底面と体部の立上がりの屈折が丸みをおびて不明瞭である。

口径8.9cm、底径5.0cm、高さ1.6cm前後の大きさで、口径が大きいもの(473~475=e1類)。

口径8.5cm、底径4.9cm、高さ1.7cm前後の大きさで、この類の中では高いもの(476~508=e2類)。

口径8.9cm、底径5.6cm、高さ1.4cm前後の大きさで、口径と底径が大きいもの(509~516=e3類)。

口径8.5 cm、底径5.3 cm、高さ1.5 cm前後の大きさで、口径の大きさに比較して底径が大きいもの(517～566 = e 4類)。

口径8.5 cm、底径5.4 cm、高さ1.2 cm前後の大きさで、e 4類に比べ浅いもの(567～583 = e 5類)。

口径8.3 cm、底径5.7 cm、高さ0.9 cm前後の大きさで、最も浅いもの(584～586 = e 6類)。

口径8.1 cm、底径5.3 cm、高さ1.1 cm前後の大きさで、口径が最も小さいもの(587～591 = e 7類)。

口径8.3 cm、底径4.6 cm、高さ1.4 cm前後の大きさで、口縁端部が垂直で幅が広いもの(592～596 = e 8類)。

に細区分できる。

この他、皿とみられるもので、底部を突出させたもの(図18-597)が、前庭部から1点出土している。底面は、糸切りのままである。

(3) 片口鉢

大小の別と片口の形状及び色調の違いから次のように分類できる。

I類(図19-612～619)

片口の形状が円形で丸みをもち、灰色の色調のものが多い。体部下半の三分の一から二分の一ほどまでをへら削りによって整形し、腰部が丸みをおびる。

口径30cm、高台径13cm、高さ12cm、高台の高さ1.4 cm前後の大きさである。高台の高さが1 cmと低いもの(618・619)もある。

II類(図20-620～627・図21-628～634・図22-635～643)

片口の形状が偏平で横に平坦になったもので、クリーム色の色調のものが多い。体部下半の三分の一から二分の一ほどまでをへら削りによって整形する。次のように細区分できる。

口径30cm、高台径14cm、高さ13cm、高台の高さ1.4 cm前後の大きさで、体部の腰部に丸みをおびるもの(620～628 = II 1類)。

口径30cm、高台径15cm、高さ13cm、高台の高さ1.4 cm前後の大きさで、体部が直線的に広がるもの(629～637 = II 2類)。

口径28cm、高台径14cm、高さ14cm、高台の高さ1.4 cm前後の大きさで、体部が直線的に広がり口径の小さいもの(638～640 = II 3類)。

口径30cm、高台径14cm、高さ13cm、高台の高さ1.4 cm前後の大きさで、体部が直線的に

広がりへら削りの整形が下方にわずかに加えられるもの(641・642 - II 4類)。

口径27cm、高台径13cm、高さ9cm、高台の高さ1cm前後の大きさで、浅くてへら削りの整形が下方にわずかに加えられるもの(643 - II 5類)。

III類(図23-644 ~ 654)

小型で片口の形状は円形で丸みをもつもの。灰色の色調のものが多い。体部下半の三分の一から二分の一ほどまでをへら削りによって整形する。口径23cm、高台径12cm、高さ9cm、高台の高さ0.6cm前後の大きさである。

IV類(図23-655)

小型で片口の形状が扁平で横に平坦になったもの。口径23cm、高台径13cm、高さ7.5cm、高台の高さ0.5cm前後の大きさである。

(4) 短頸壺(図18-598)

灰原から1片のみ出土している。小さな破片で口径を推定できないが、短くて端部の丸い口縁部が垂直につく形状である。胎土は砂粒が少なく緻密である。

(5) 片口碗(図18-599・600)

口縁部の破片が2点出土している。口端部が体部と同じ厚みで丸く治まるものと、やや尖り気味になるものがある。推定値は599が、口径11cm、最大胴径が12.5cm、600が口径12cm、最大胴径が13cm、である。599が焚口近くから、600が灰原から出土した。

(6) 玉縁状口縁壺(図18-601)

口縁部の破片が1点のみ灰原から出土している。推定口径11cmである。

(7) 片口小壺〔甕口壺〕(図18-602)

自然釉が厚くかかり焼き割れたものが灰原から1個出土している。頸部上方が細くしまり、口部が屈折して受口状に開く形状で端部に一か所小さく口が付けられている。口径4.7cm、高さ11.6cm、胴径12cm、底径10.3cmの大きさである。

(8) 片口山茶碗(図18-607)

灰原から1個のみ出土している。口縁部に一か所片口を付ける。口径16cm、残存高さ6cm、底径6.5cmで、高台が付くものようである。一般の山茶碗よりひとまわり大きい形態であり、片口用として碗自体を製作したものとみられる。

(9) 広口壺 (図18-608 ~610)

灰原から5片ほど出土している。口縁部を受口状に作り出し、肩部に沈線を2条めぐらすものようである。推定口径は、608 が18.8cm、609 が17.5cmである。

(10) 大甕 (図18-611)

図示した口縁部の破片1点と同部片が数点、灰原から出土している。口縁部を上下に折り曲げて口縁帯を作り出し、口縁部が受口状になる形状である。

この器形に伴うとみられる胴部片に格子目の押印文 (図18-604 ~606) を施すものがある。

(11) 陶丸 (図版64)

山茶碗の中に8個ほど種着したものが灰原から出土している。直径2.3cmで、十字のへら描き文が加えられている。

(12) 台付碗 (図7-89)

焚口の左横から出土した。碗に台形の台を付けた形状。口径12.8cm、全体の高さ6.4cm、台自体の高さ1.5cmで、碗自体は普通の山茶碗より小さいものである。

(13) 円盤状陶製粘土塊 (図18-603)

灰原から1点のみ出土している。直径8.7cm、厚み1.5cmの円盤で、表裏面に整形時の指頭の痕が見られる。胎土は山茶碗などの製品と同じである。

第5 まとめ

1 出土遺物の変遷

(1) 燃焼室内出土の遺物 (図7-67~102)

分焰柱と焚口の間の燃焼室内に堆積する炭化物層(図4の26層)及びその上面から出土した遺物を先に分類した区分でとらえると、山茶碗としては、D類に属するものが多く、小皿は、e類が占めている。

このことからみて、灰原からしか出土しない山茶碗A類~C類と、小皿a類~d類は、燃焼室に残った一群より先に焼かれた製品のようである。

(2) 分焰柱張り付けの遺物 (図13-377~382)

分焰柱を補修した際に張り付けられた山茶碗と柱の芯として積み重ねられた片口鉢は、山茶碗がD類(377~381)とG類(382)、片口鉢がII類の製品である。

(3) 山茶碗と小皿の併焼関係

山茶碗の上に小皿を積み重ねて焼成しているが、自然釉が厚くかかり軸着して廃棄されたものを割ってこれらのセット関係について調べてみると、次のように併焼されたものがある。

山茶碗のB類と小皿のb類。山茶碗のC類と小皿のc類。山茶碗E類とG類と小皿e4類。山茶碗E類と小皿e2類とe7類。小皿e3類とe5類。

(4) 遺物の変遷

山茶碗、小皿などの併焼された前後関係をみると、山茶碗B・C類、小皿b・c類は、燃焼室内出土の遺物にはなく、分焰柱を補修した山茶碗D類より先の製品としてとらえられる。しかし、これらのセットで焼かれている製品に前後関係があるのか、同時期における形態差なのかについては、不明である。

山茶碗のうちD類、E類、F類についても、前後関係にあるものかどうかは、不明である。これらには明確な形状差はなく、法量の違いが認められるのみである。

法量の違いは、知多郡武豊町の中田池古窯址群¹¹⁾の発掘調査における窯内出土の一括遺物をみても、口径に2.5 cm、高台径に2 cm、器高に1.5 cmもの差が認められているところである。

山茶碗G類とした高台を付けないものは、山茶碗D類の時期から最終焼成時の製品にまで認められる。

小皿は細い点で多くの区分が可能であるが、e類としたもののなかではe1類とe6類

の間には前後の差があるとみられる。小皿に前後の差があるものとすれば、山茶碗D類、E類、F類においても前後の差があることになろう。

片口鉢は、出土した区域などからの推定であるが、I類としたものが山茶碗B・C類に伴うものようである。Ⅲ・Ⅳ類とした小型のものについても、I類の時期から伴うものようである。

山茶碗、小皿、片口鉢のほかは、わずかな遺物であるが、短頸壺(598)を除くものが、上記の山茶碗、小皿、片口鉢に伴うものである。

これらの製品は、器形の変遷に大きな変化がないことから引き続き焼成されたものであろう。

遺物の場所及び調査の所見からみて、山茶碗、小皿のA・a類を除く製品が本窯で焼成された製品だとして、以下の遺物の変遷があったものと考えられる。

山茶碗	B類	C類	D類・G類	分 壇 柱 補 修	E・F・G類
小皿	b類	c類	e 1類		e 2～e 6類・e 7・8類
片口鉢	I・Ⅲ類		Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類		
その他					

2 遺物の時期

山茶碗A類、小皿a類、短頸壺(598)は、留木第8号窯の製品ではなく、別の古窯のもので、本窯の北横で一部灰原(図4の4・16～20層)を検出した留木第7号窯の製品のようにある。これらの製品は、常滑窯変遷の第Ⅱ段階の前半期(A・D. 1150～1200)の内に位置づけられるものである。さらに詳細に見た場合、知多古窯址群出土遺物の編年の第3期(A・D. 1175～1200)に属するものであろう。知多郡武豊町の中田池古窯址群の編年では、B地点X号窯(第2型式2期)の製品に類似するものである。

上記以外の製品については、常滑窯変遷の第Ⅲ段階の前半期(A・D. 1250～1350)の内に位置づけられるものである。さらに詳細に見た場合、知多古窯址群出土遺物の編年の第5期(A・D. 1250～1300)に属するものであろう。知多郡武豊町の中田池古窯址群の編年では、A地点1号窯(第3型式2期)の製品に類似するものである。

(1) 磯部幸男、奥川弘成『愛知縣知多郡武豊町中田池古窯址群』その1 武豊町文化財調査報告書第8集 武豊町教育委員会 1990

(2) 赤羽一郎『常滑焼』考古学ライブラリー23 ニュー・サイエンス社 1984

(3) 中野晴久『中民の古窯』『新修半田市誌』上巻 半田市 1989

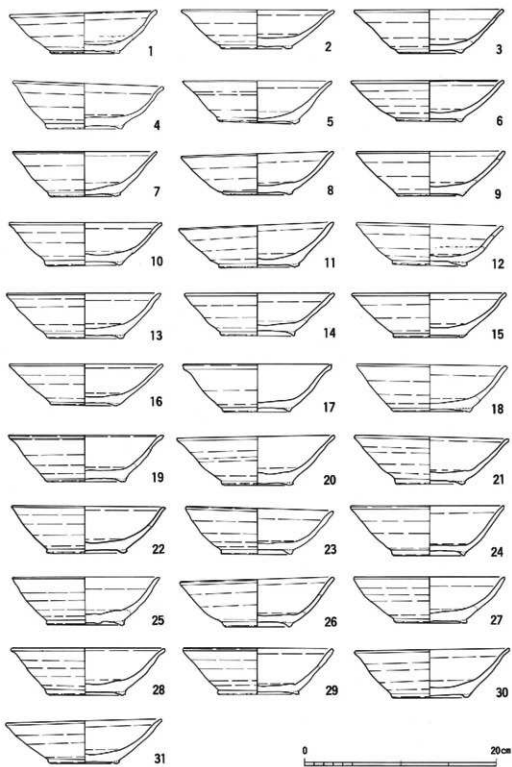


图5 留木第8号窟出土遺物1 (山茶碗A類)

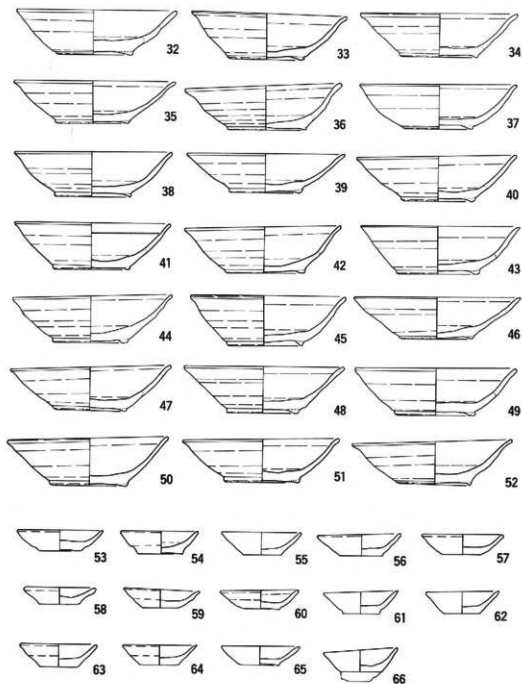


图6 留木第8号窟出土遗物2 (山茶碗A類·小皿a類)

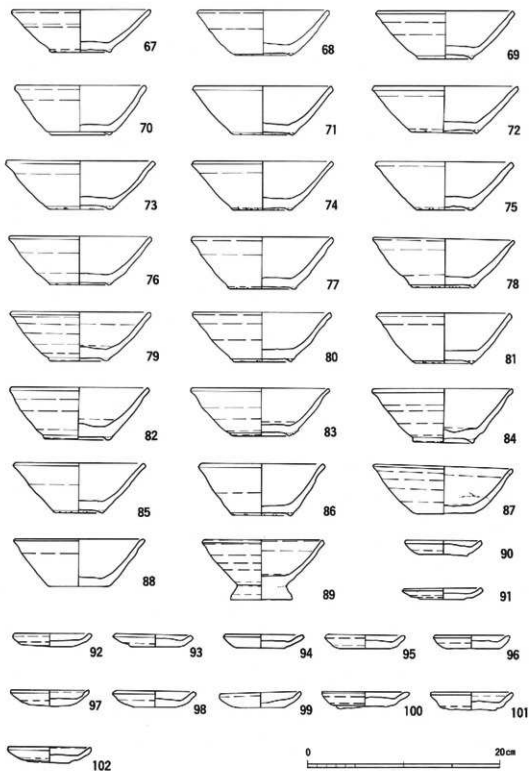


图7 留木第8号窯〔燃烧室〕出土遺物3(山茶碗・小皿)

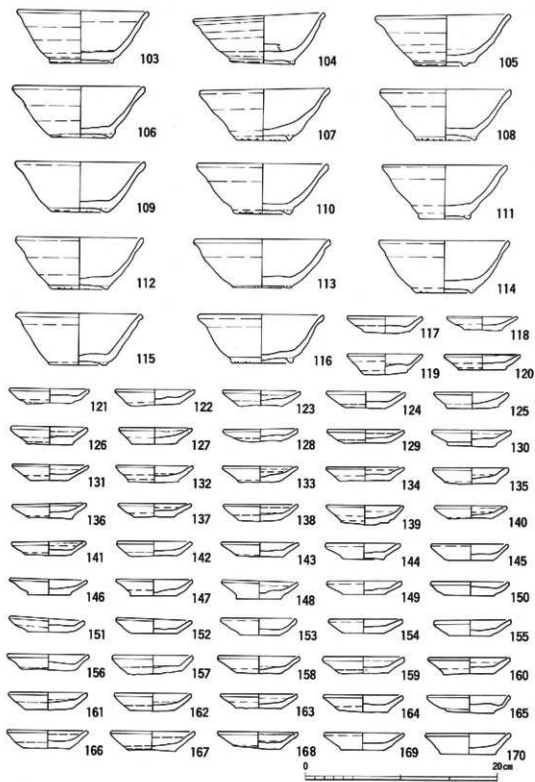


图8 留木第8号窟出土遗物4 (山茶碗B類·小皿b類)

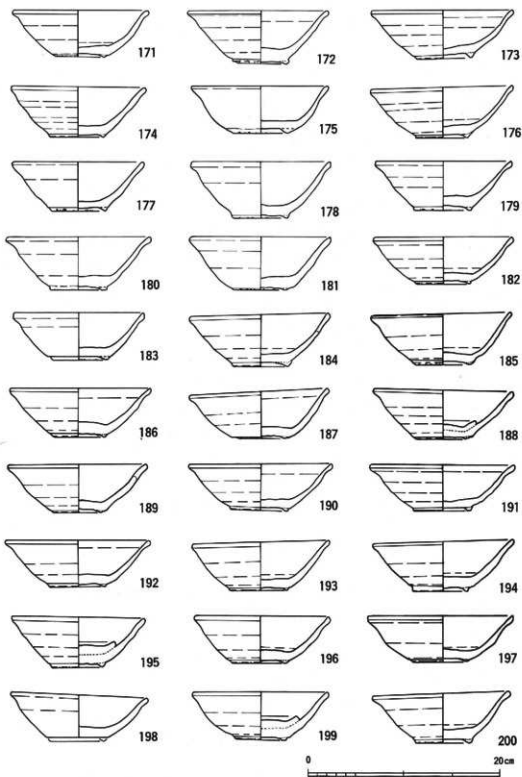


图9 留木第8号窟出土遺物5 (山茶碗C類)

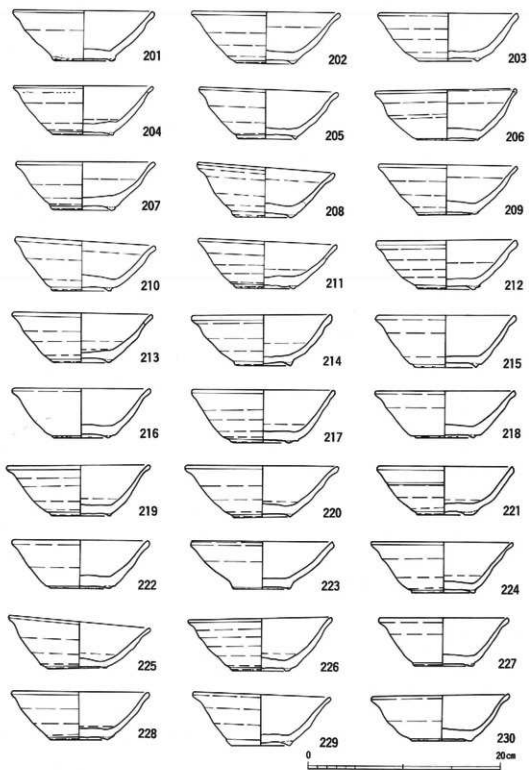


图10 留木第8号窟出土遺物6 (山茶碗C類)

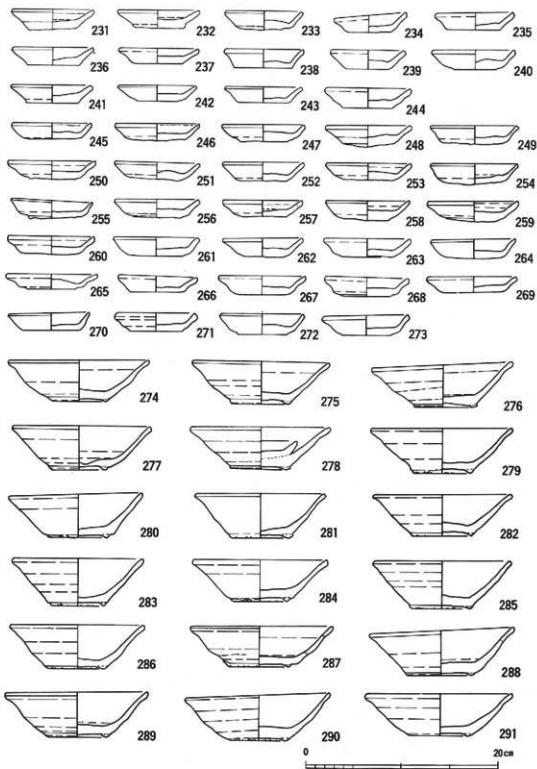


図11 留木第8号窯出土遺物7 (小皿c類・山茶碗D類)

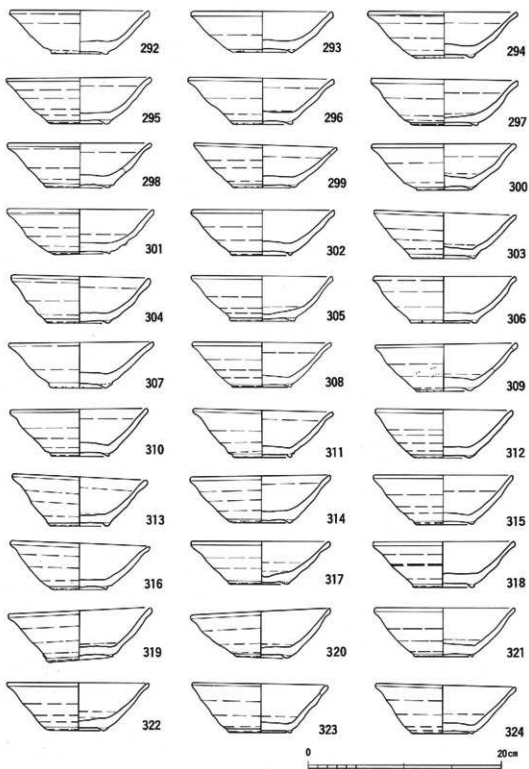


图12 留木第8号窟出土遗物8 (山茶碗D類)

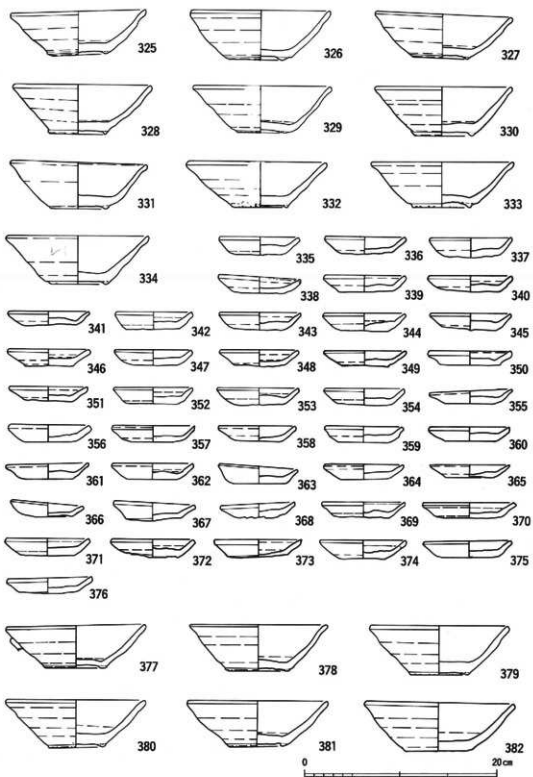


图13 留木第8号窟出土遗物9 (山茶碗D類・小皿d類)

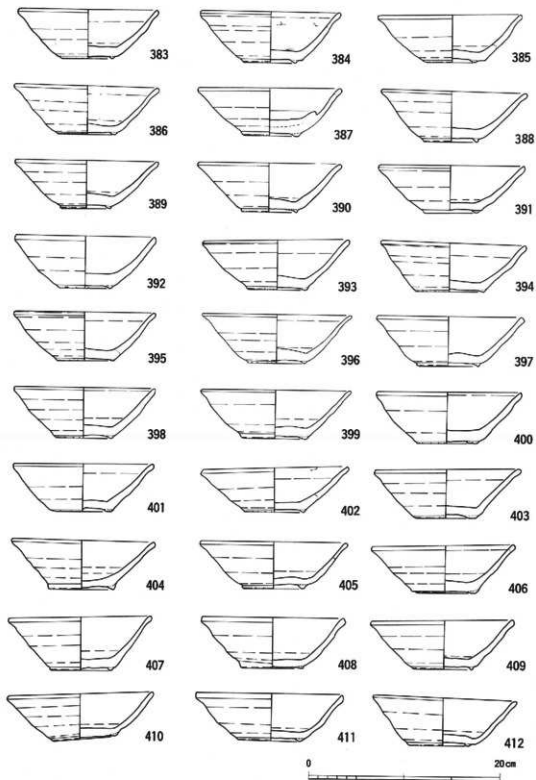


图14 留木第8号窟出土遗物10 (山茶碗E類)

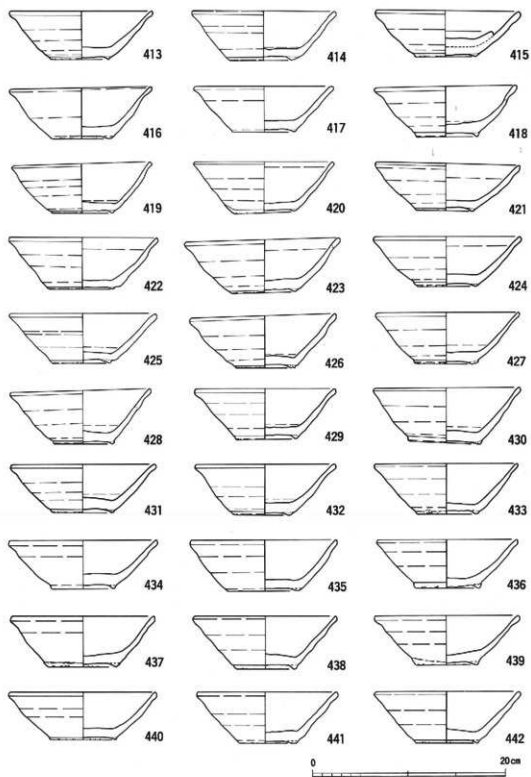


图15 留木第8号窯出土遺物11 (山茶碗E類)

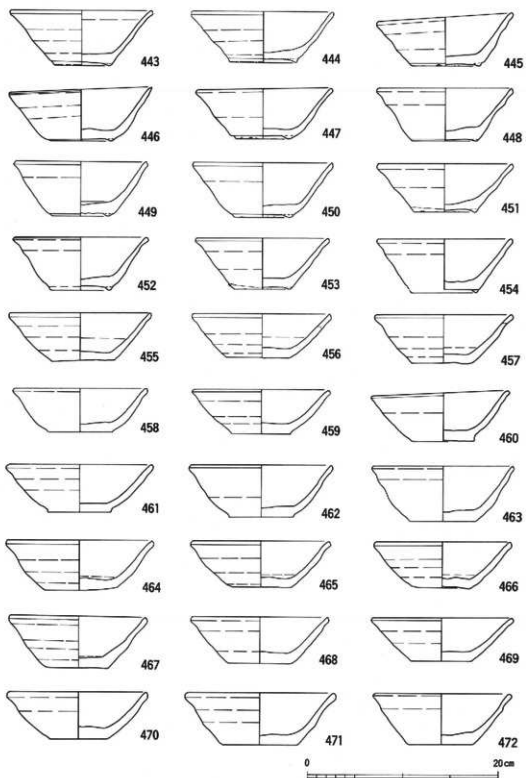


图16 留木第8号窯出土遺物12 (山茶碗F·G類)

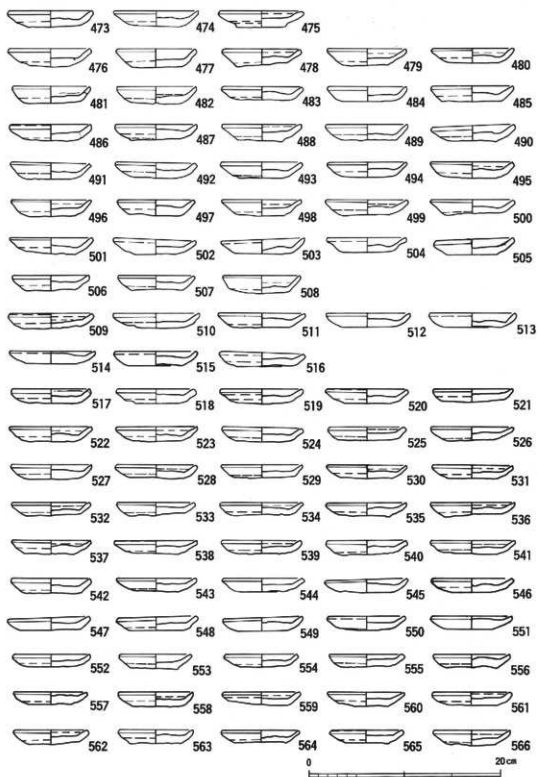


図17 留木古窯出土遺物13 (小皿 e類)

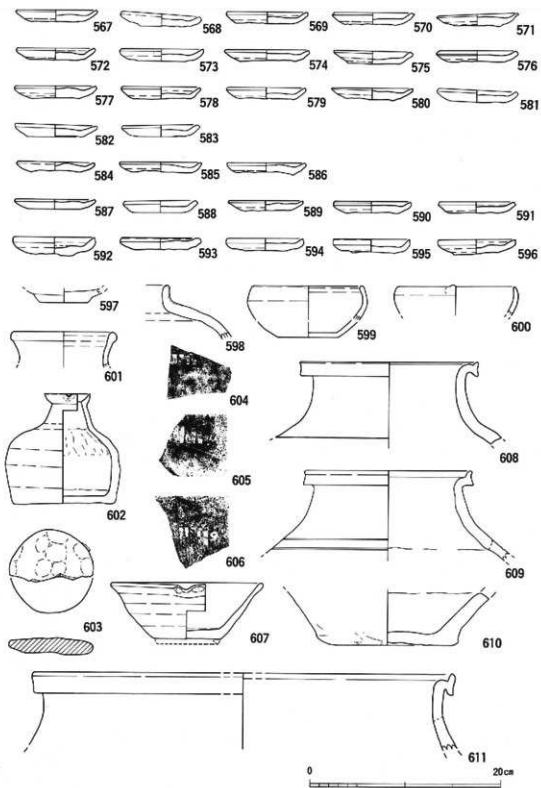


図18 留木第8号窯出土遺物14 (小皿e類・甕など)

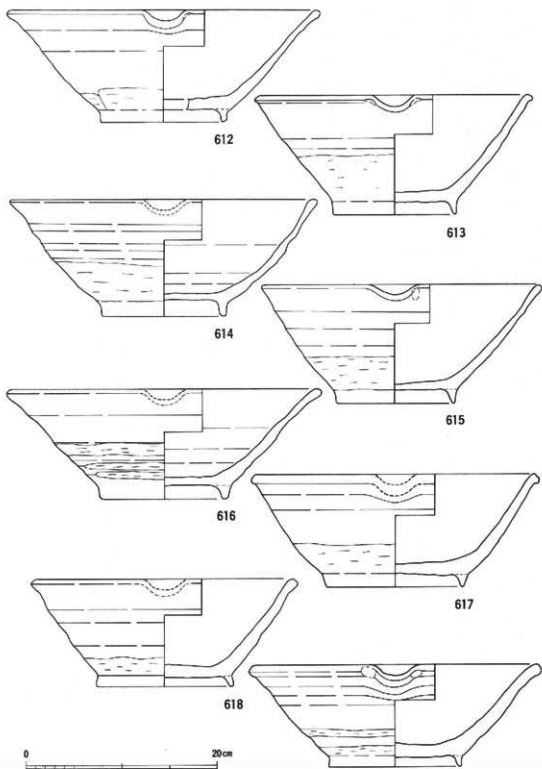


图19 留木第8号窟出土遺物15 (片口鉢I類)

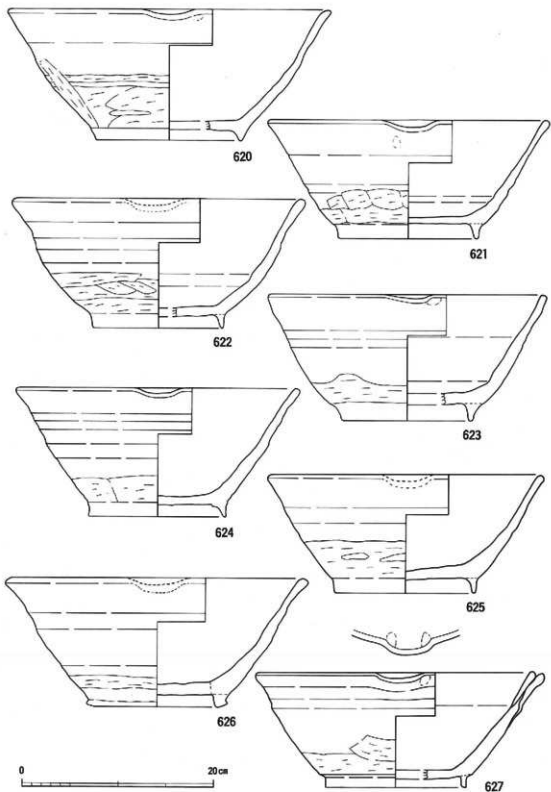


图20 留木第8号窟出土遺物16 (片口鉢Ⅱ類)

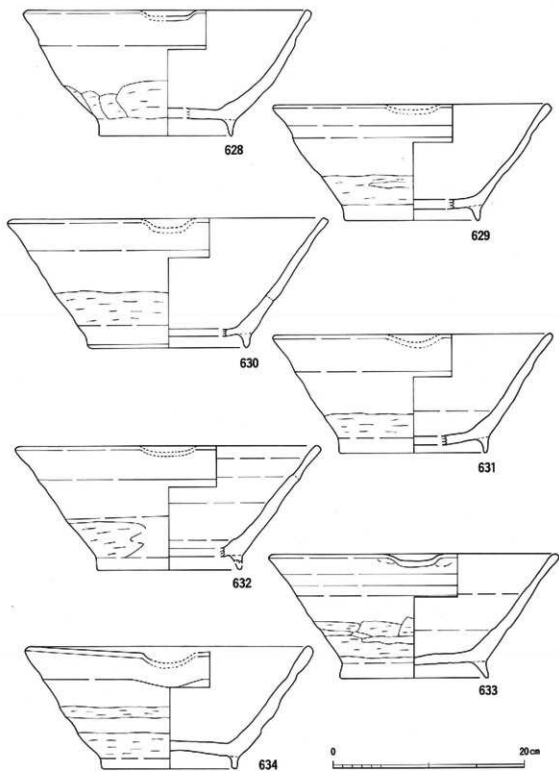


图21 留木第8号窟出土遗物17 (片口鉢Ⅱ類)

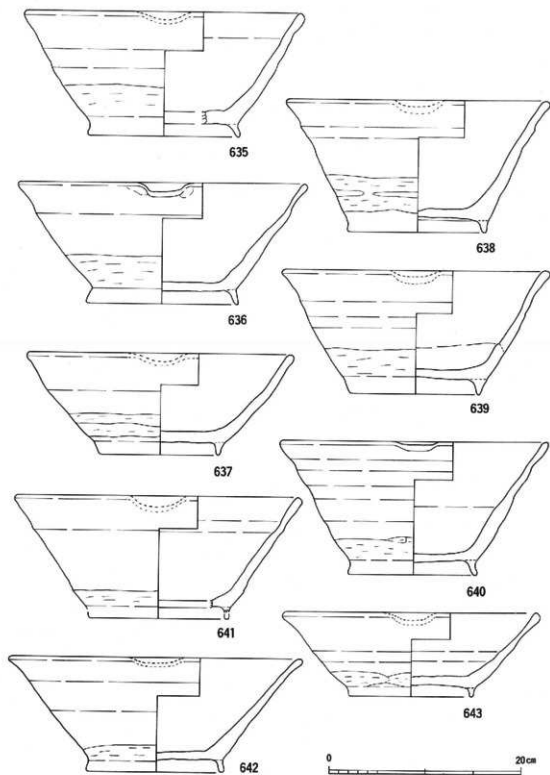


图22 留木第8号窟出土遗物 (片口鉢Ⅱ類)

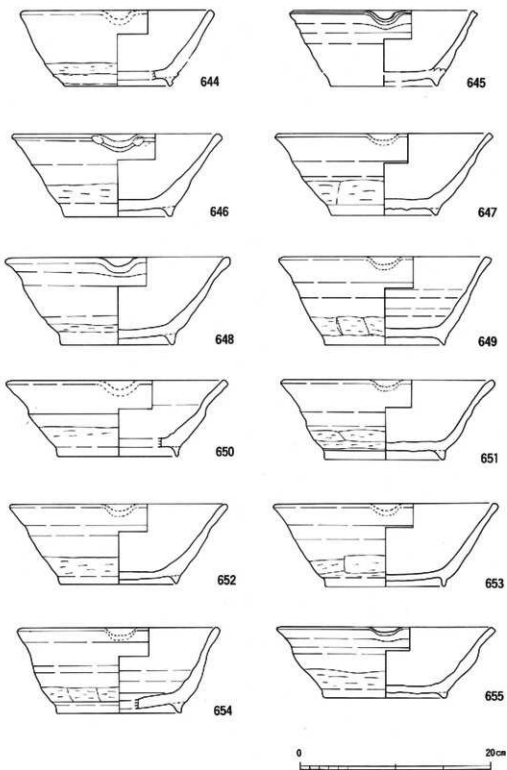
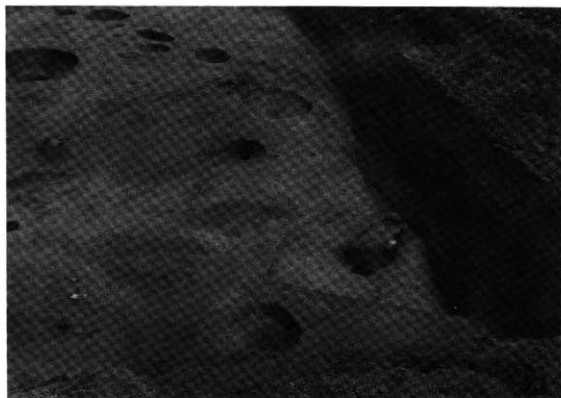


图23 留木第8号窟出土遺物19 (片口鉢Ⅲ・Ⅳ類)

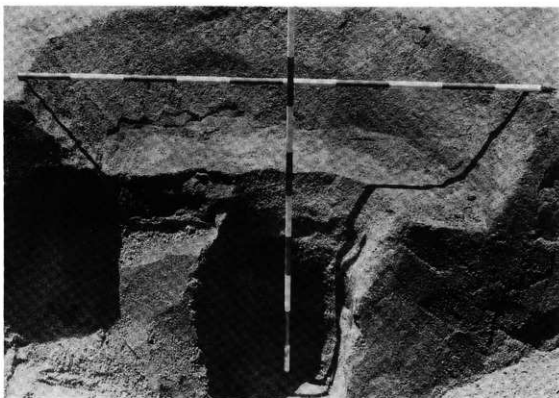
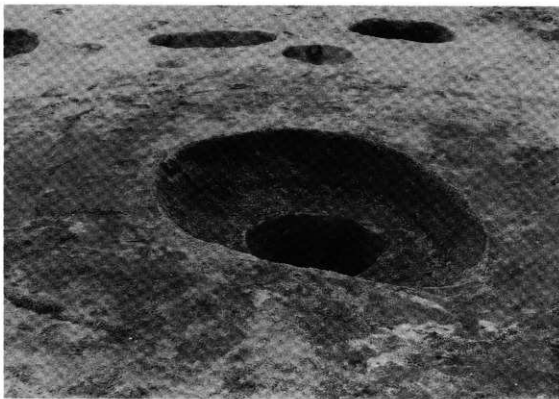
圖 版



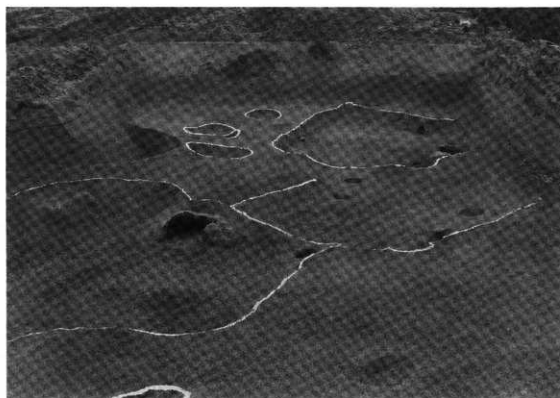
図版1 上 1区・7号堅穴住居跡
下 1区・7号堅穴住居跡（2区側から1区側を望む）



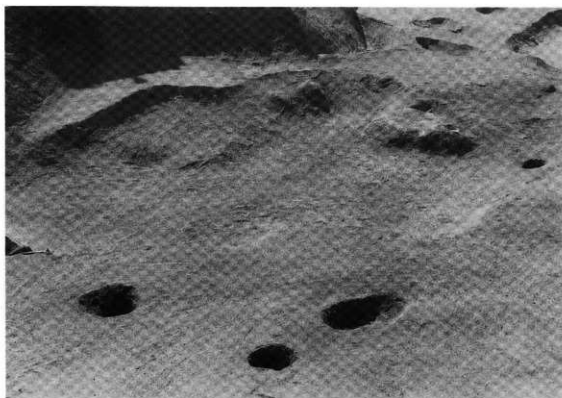
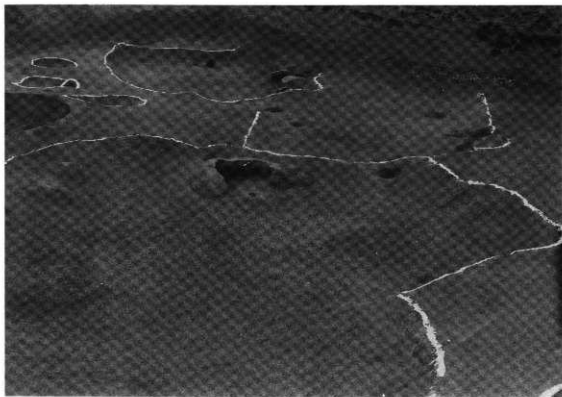
図版 2 上 1区井戸と7号竪穴住居跡（西から東を望む）
 下 1区遺物出土状態（7号竪穴住居跡南西側）



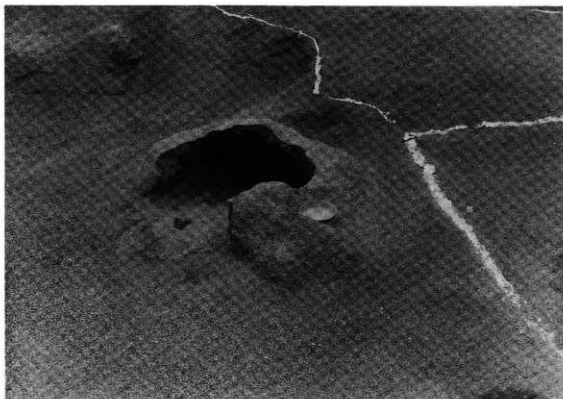
図版3 上 1区・井戸（南西から北東を望む）
下 井戸断面



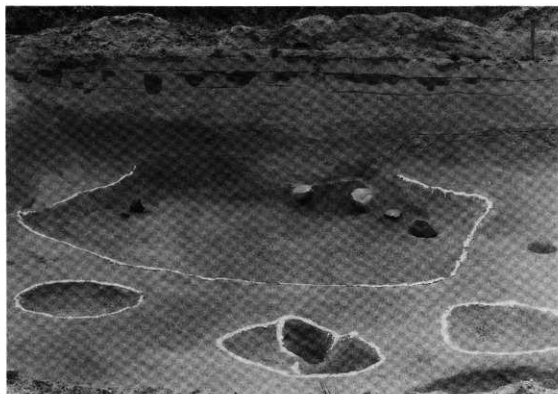
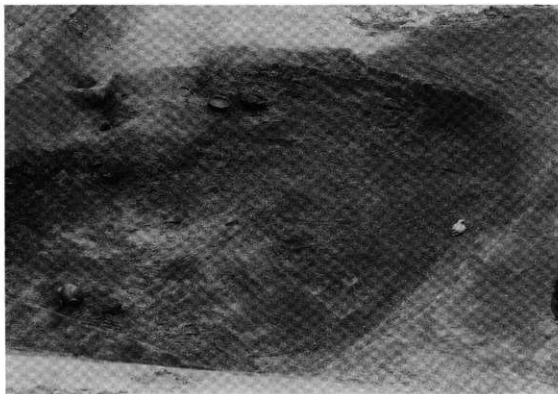
図版 4 上 2区竪穴住居跡群（南東から北西を望む）
下 2区竪穴住居跡（手前から奥へ1号・5号・2号）



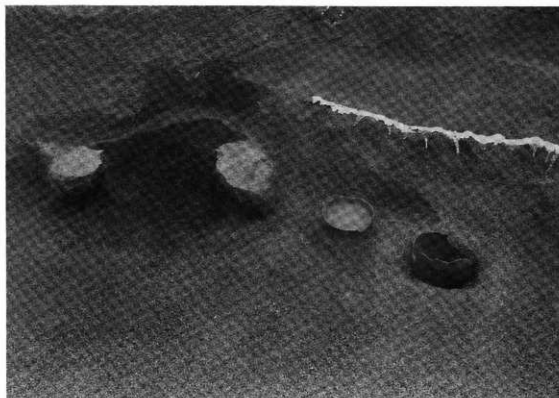
図版5 上 2区竪穴住居跡（手前から奥へ1号・5号・2号）
 下 2区・1号・3号・6号竪穴住居跡（南から西を望む）



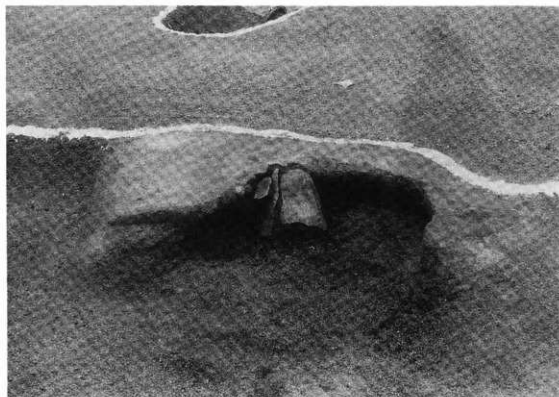
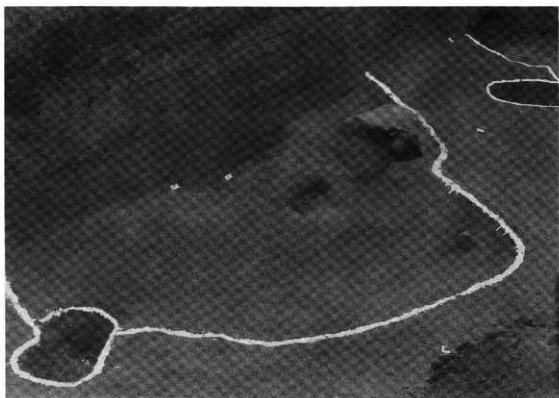
図版6 上 2区・1号竪穴住居跡かまど
下 同上



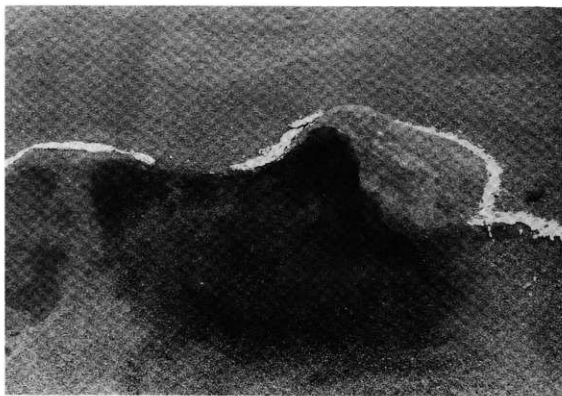
図版7 上 2区・2号竪穴住居跡（検出後の状態・1区側から2区側を望む）
 下 2区・2号竪穴住居跡（南西から北東を望む）



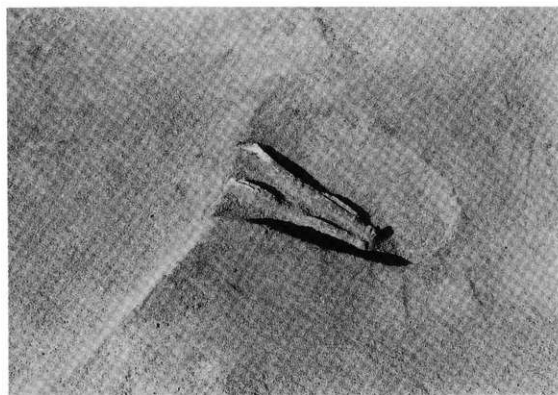
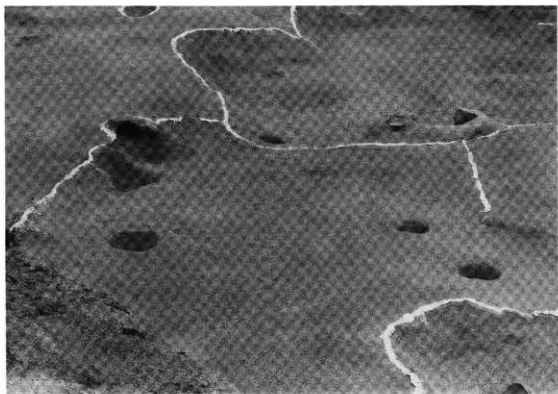
図版8 上 2号竪穴住居跡かまど
下 2号竪穴住居跡かまど周辺



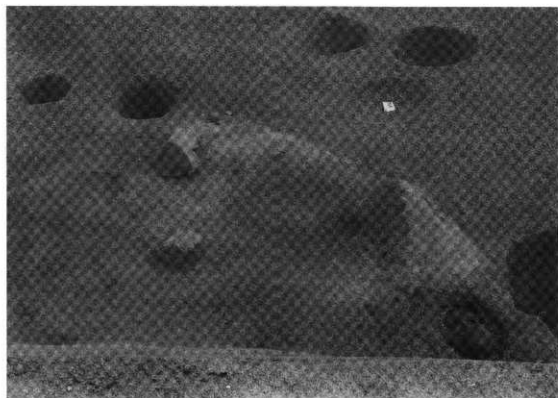
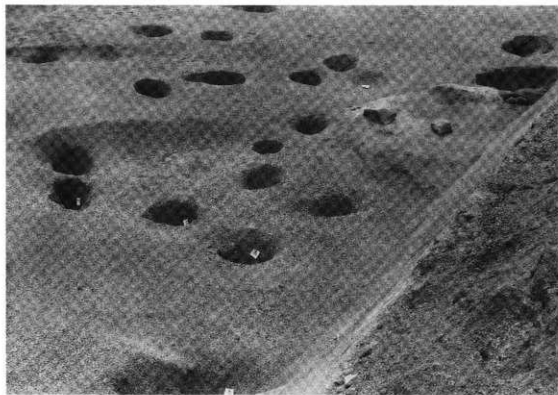
図版9 上 2区・4号竪穴住居跡（南東から北西を望む）
下 同上 かまど



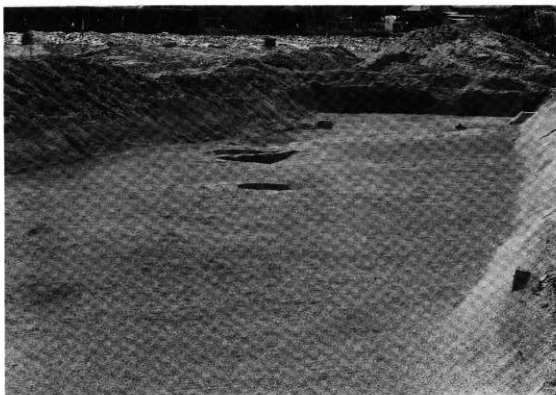
図版10 上 2区・5号竪穴住居跡（西から東を望む）
下 5号竪穴住居跡かまど



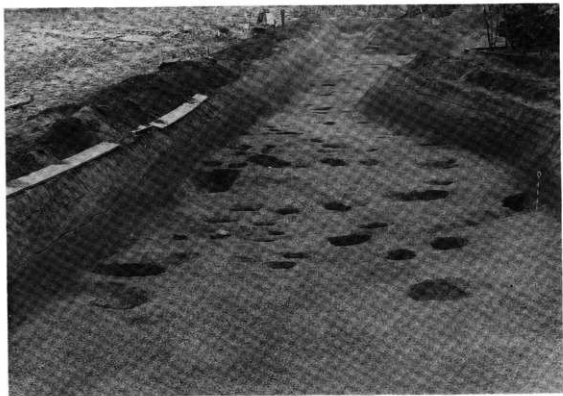
図版11 上 2区竪穴住居跡(手前5号、奥1号)
下 2区・埋葬穴(南西から北東を望む)



図版12 上 4区・8号竪穴住居跡（東から西を望む）
下 同上 粘土面部分（北東から南西を望む）



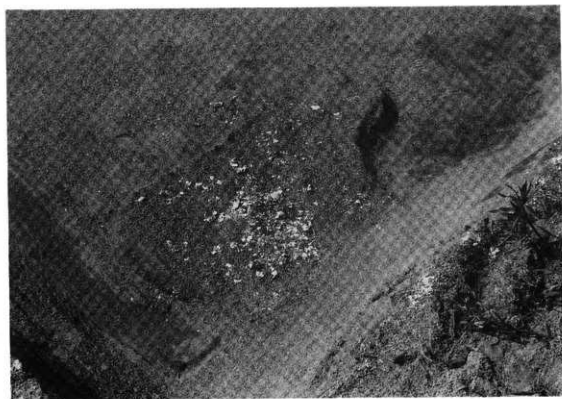
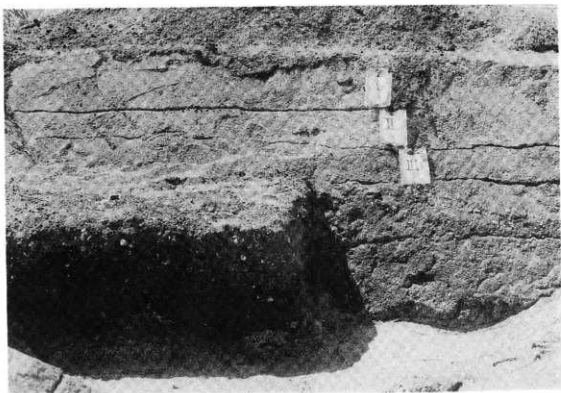
図版13 上 3区遺構検出状態（北西から南東を望む）
下 3区・穴3-1遺構（北から南を望む）



図版14 上 4区遺構検出状態（北西から南東を望む）
下 5区遺構検出状態（南東から北西を望む）



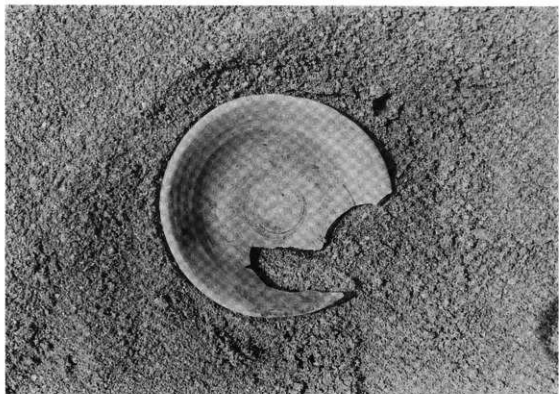
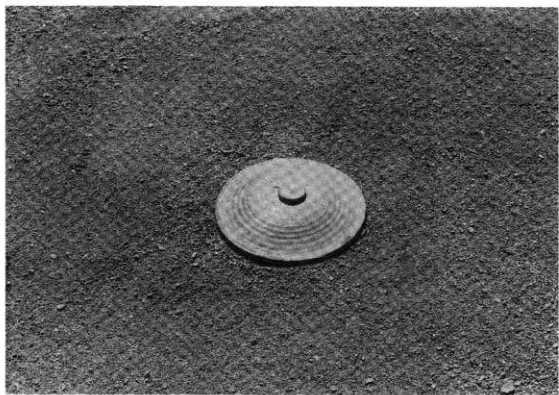
図版15 上 5区遺構検出状態 (南西から北東を望む)
下 8区遺構検出状態 (南東から北西を望む)



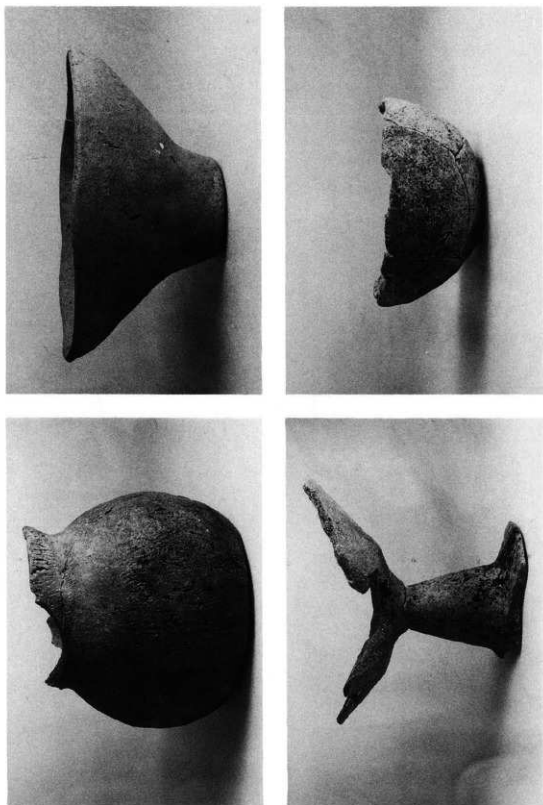
图版16 上 1区·1号冢断面
下 2区·2号冢检出状态



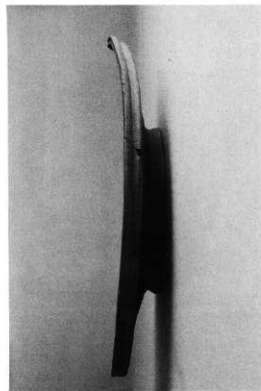
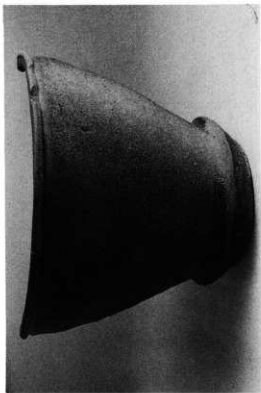
图版17 上 8区・3号貝塚遺物(土師器鉢形土器)出土状態
下 同上(土師器甕形土器)



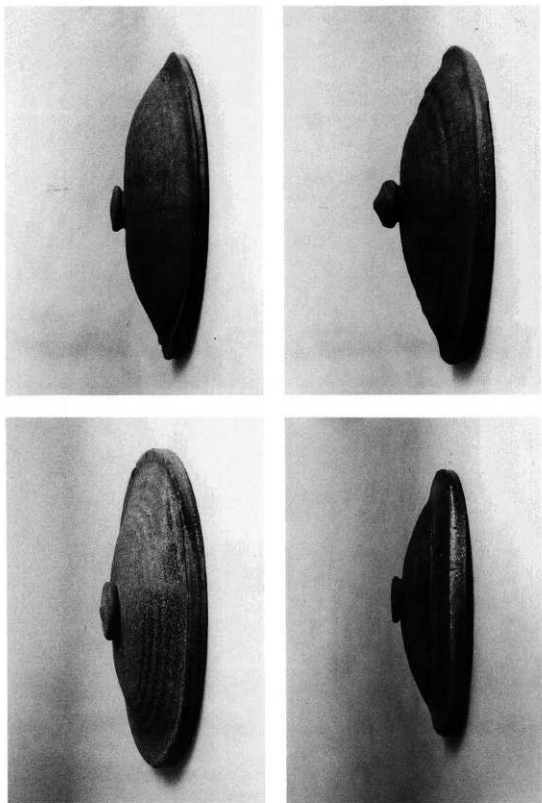
圖版18 上 遺物出土狀態 (須惠器蓋)
下 同上 (「太」墨書土器)



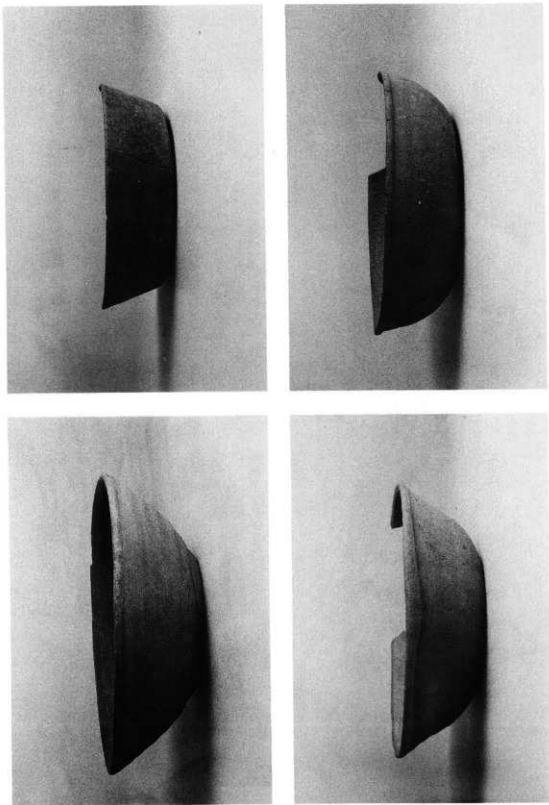
图版一九 八区出土土器 右：钵形土器（上：二二五，下：二二六）
左上：钵形土器（二二二） 左下：高杯形土器（二二九）



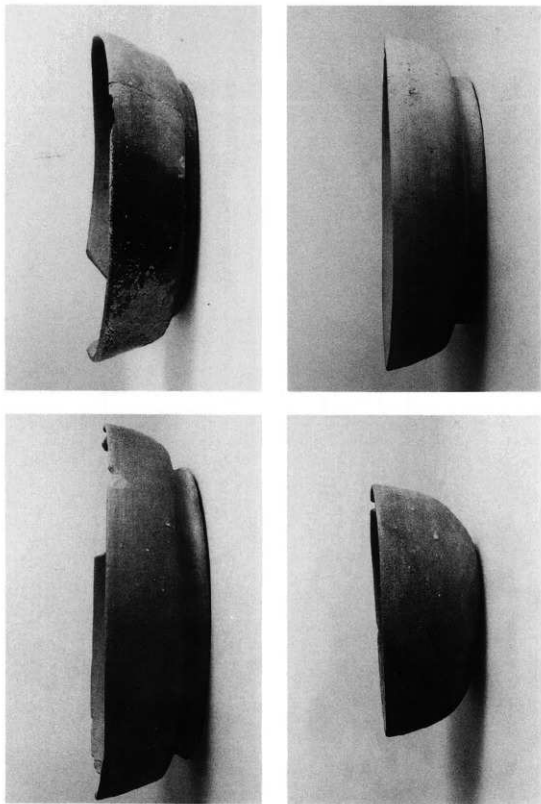
圖版二〇 須臾器 右上：凹面碗（二〇七） 右下：七号墩穴出土鉢形土器（七八）
左上：二号墩穴出土長頸瓶（五九） 左下：盤（二二二）



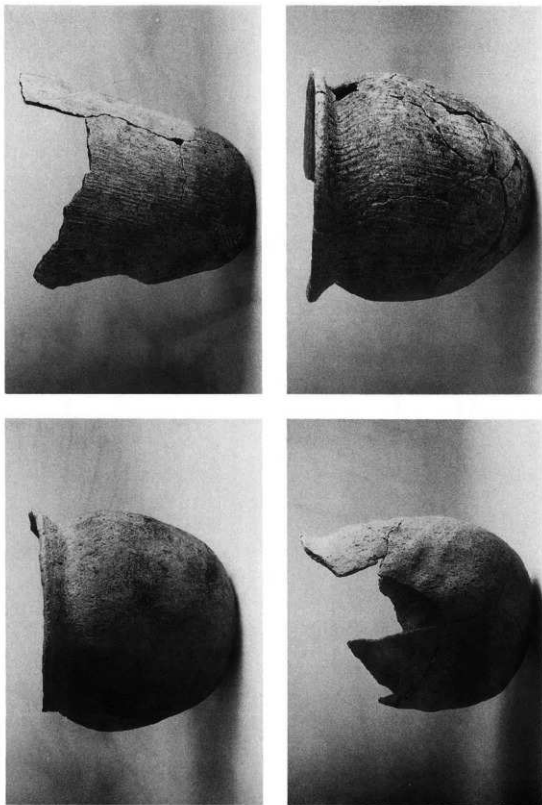
图版二 須惠銅鑄蓋 右上・(七三) 右下・(二七〇)
左上・(二六九) 左下・(二六八)



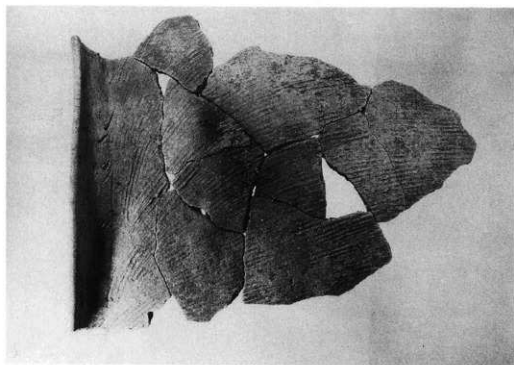
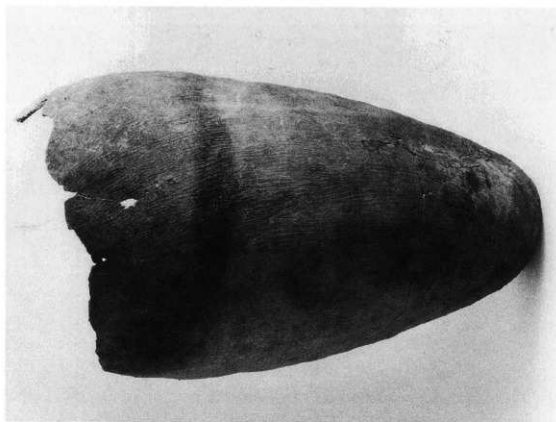
圖三三 須置器杯 右上：(八六) 右下：(二二)
左上：(二八九) 左下：(二八四)



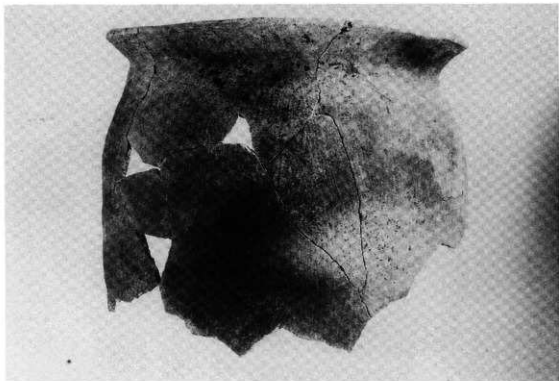
图版三 须臾爵杯
右上：(二九六) 右下：(一四)
左上：(五五六) 左下：(一四)



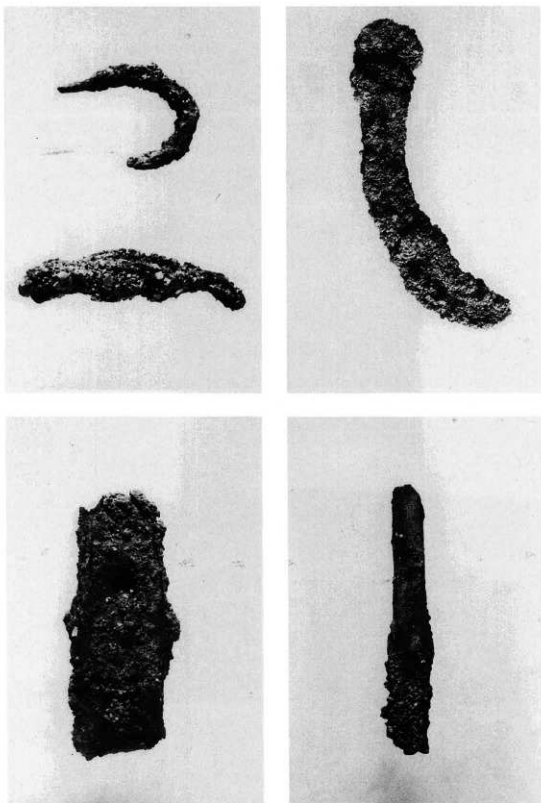
图版二四 彩形土器 右上・四号塚穴かまど(六九) 右下・一号・六号塚穴(三二)
左上・(三三二) 左下・三区穴三十三出土丸底(八九)



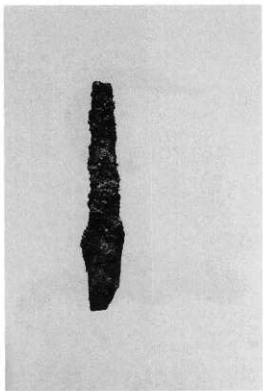
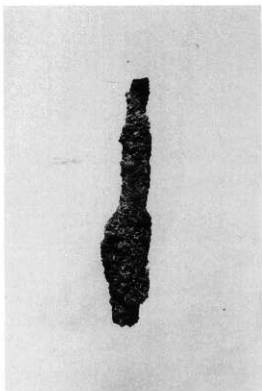
图版二五 黑彩土器
右・二身塚穴かまど出土(六四)
左・七身塚穴かまど内出土(七二)



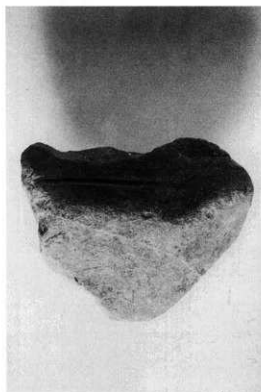
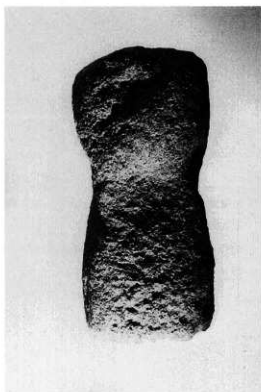
图版26 上 甕形土器 (4号竖穴住居出土・68)
下 土錘



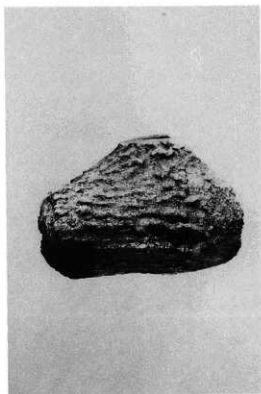
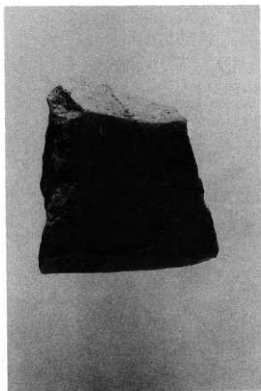
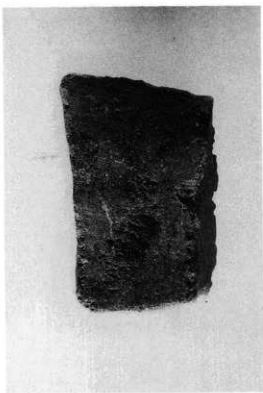
圖版二七 鐵製品 右上・鈎針(右・二五二) 左・二五三 右下・鏃(二五二)
左上・用途不明(二五七) 左下・刀子(二四八)



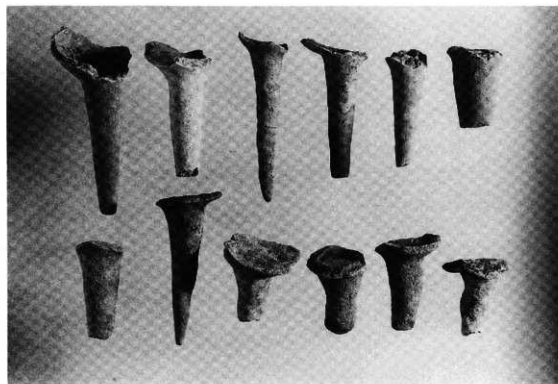
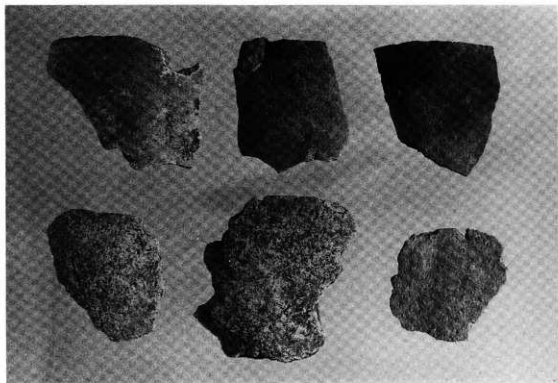
図版二八 刀子と鬚書土器
右・刀子(上・二四六下・二四七)
左・鬚書土器(上・一七六下・一九一)



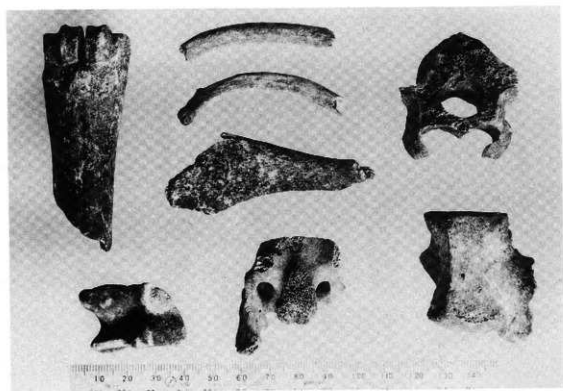
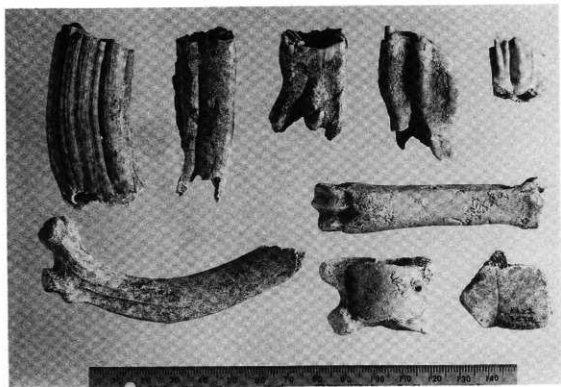
図版二九 石器 右上：くほみ石（三三） 右下：くほみ石（三三）
左上：くほみ石（三五） 左下：砥石（三五）



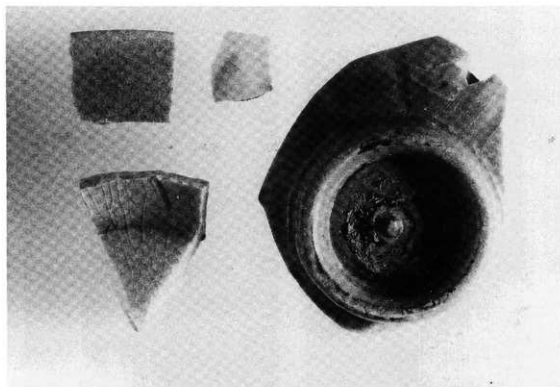
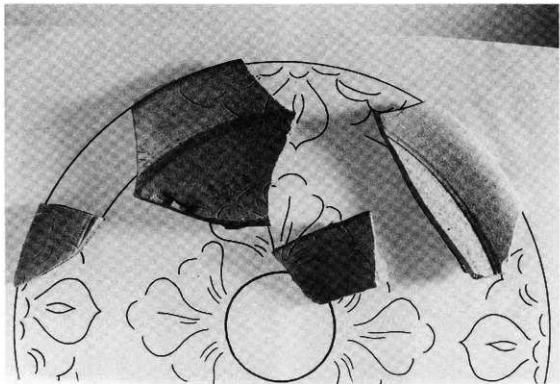
圖三〇 砥石・土師器・鹿角 右上・砥石(三五) 右下・砥石(三六)
左上・放射線式の土師器杯 左下・鹿角



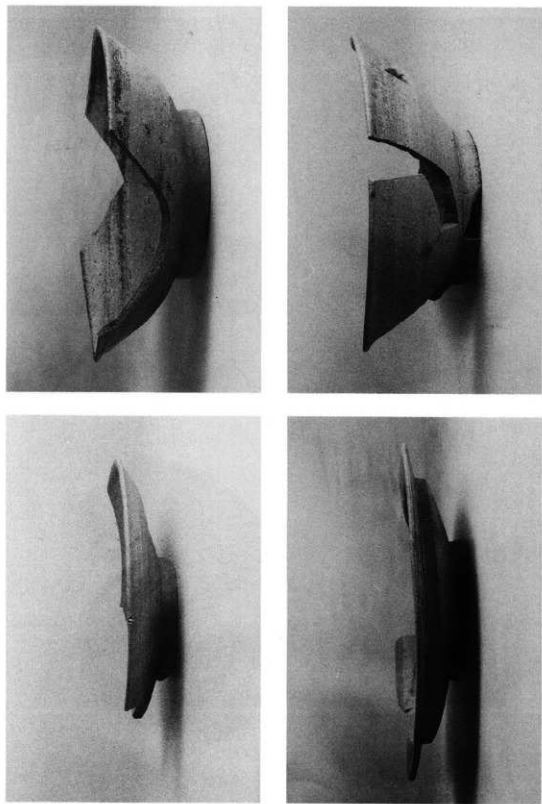
図版31 上 知多式製塩土器 ■ 杯口縁部 (右下5類・他は4類)
 下 同上脚部 (右下5類・他は4類)



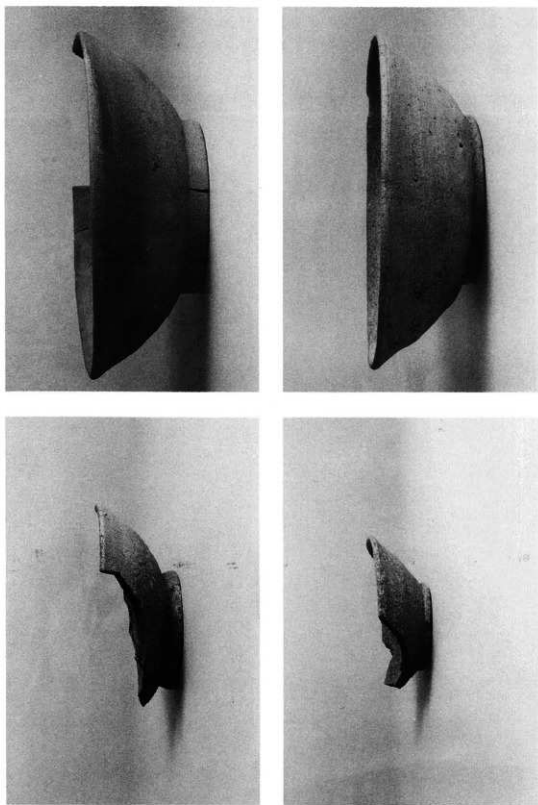
图版32 上 各区出土兽骨类
下 3号贝塚出土兽骨类



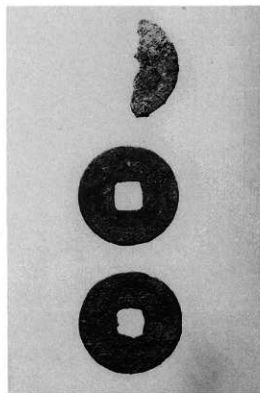
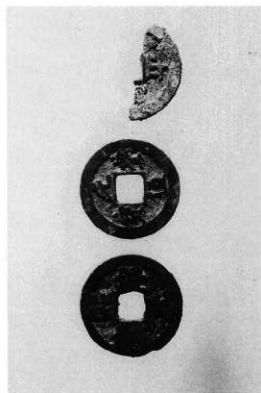
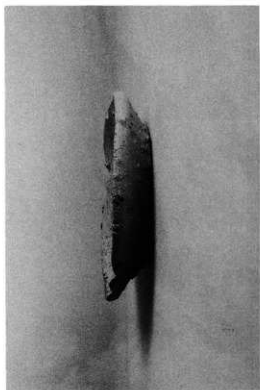
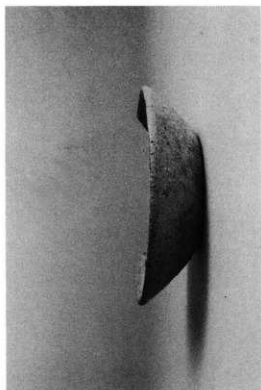
图版33 上 阴刻花文灰釉残皿
下 中国製青磁甗



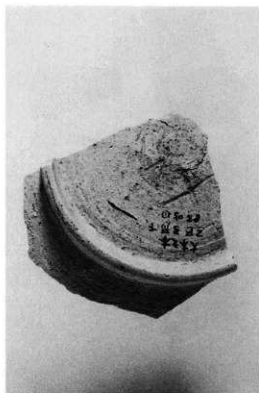
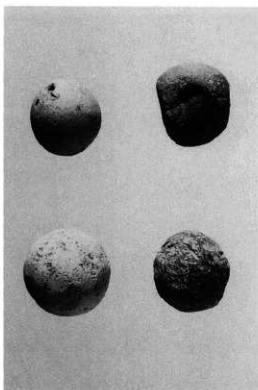
圖版三四 灰釉陶器 右：碗（上：二三四下：三三三）
左：皿（九五） 左下：盤皿（九四）



图版三五 山茶碗与小皿
右：山茶碗（上：三三五下：三三六）
左：小皿（上：三三〇下：九七）



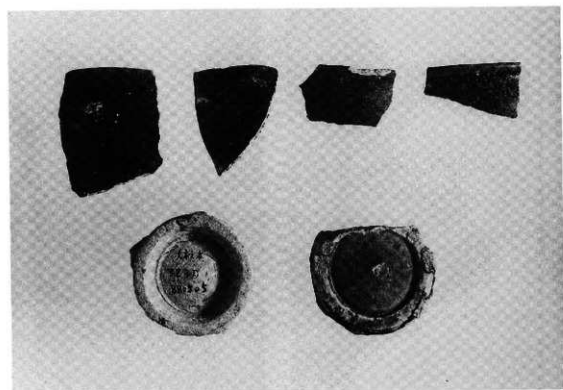
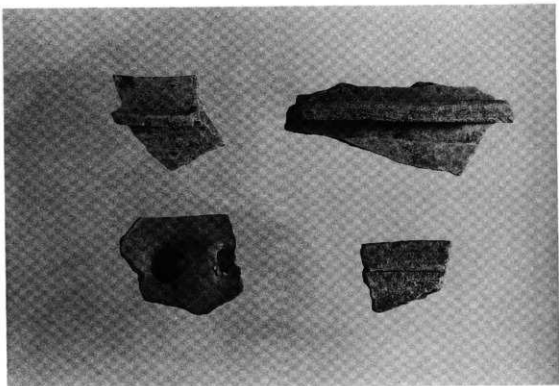
圖版三六 小皿と錢貨 右・小皿(上・三三二下・三四九)
左・錢貨(上・表下・裏)



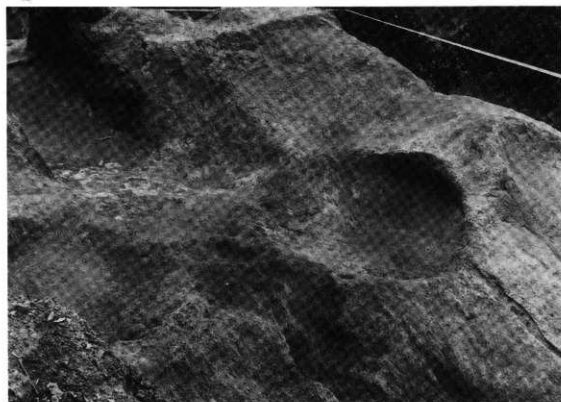
図版三七 碗・陶丸・土師質皿など

右上・碗(三五〇) 右下・陶丸

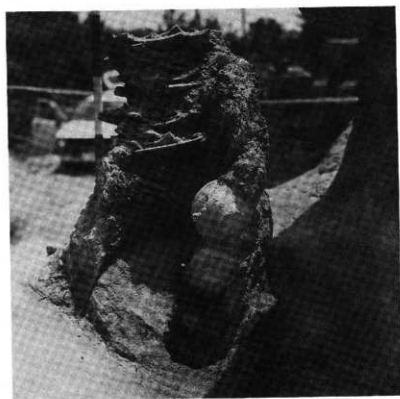
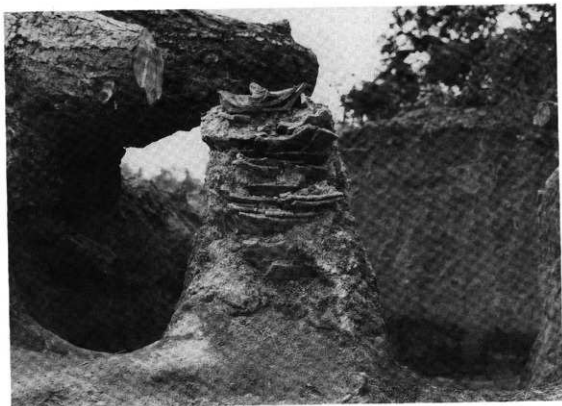
左上・灰釉椀(三三九) 左下・手づくねの皿



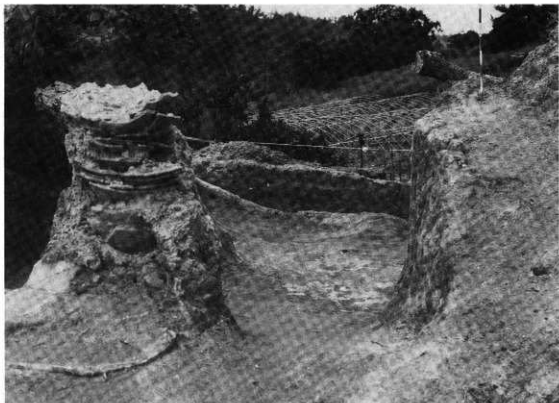
図版38 上 中世以降の土師器系土器
下 天目茶碗



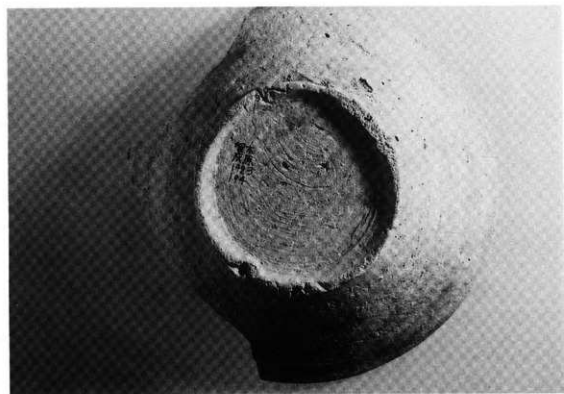
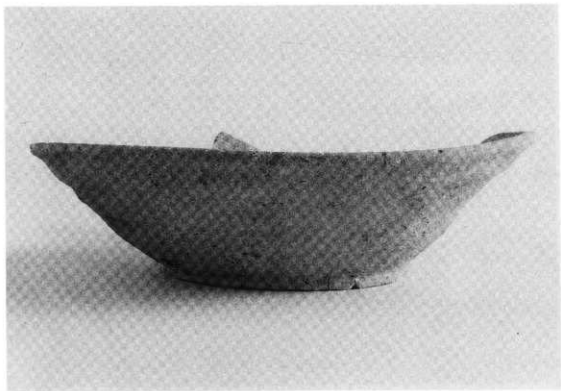
図版39 上 留木古窯全景（西から東を望む）
下 留木古窯前庭部（北西から南東を望む）



図版40 上 留木古窯分焰柱（東から西を望む）
下 同上（西から東を望む）



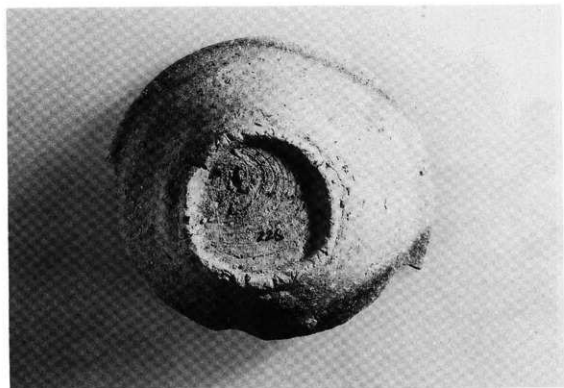
図版41 上 留木古窯全景（東から西を望む）
 下 留木古窯灰原（西から東を望む）



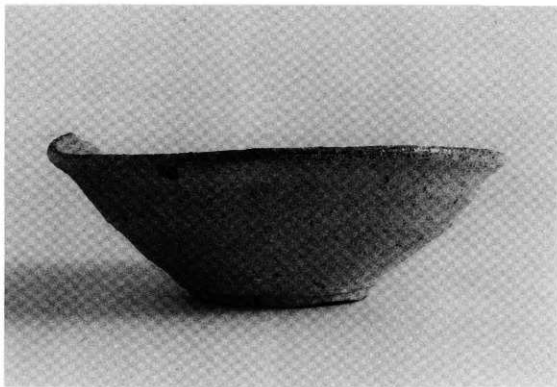
图版42 上 留木古窯出土山茶碗（图5-14·A類）
下 同上底面



图版43 上 留木古窯出土山茶碗 (图6-49·A類)
下 同上 (图6-35·A類)



图版44 上 留木古窯出土山茶碗 (图16-447·B類)
下 同上底面



圖版45 上 留木古窯出土山茶碗 (圖9-173·C1類)
下 同上底面



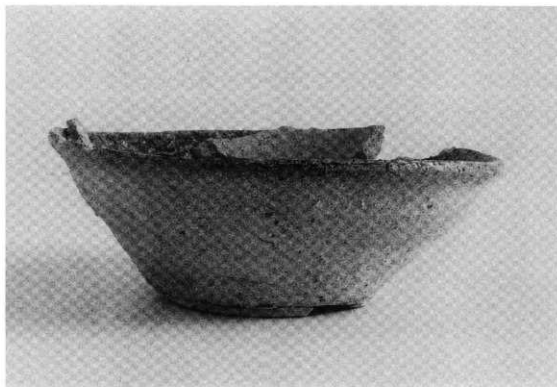
圖版46 上 留木古窯出土山茶碗 (圖10-205・C2類)
下 同上底面



圖版47 上 留木古窯出土山茶碗 (岡12-311・D類)
下 同上底面



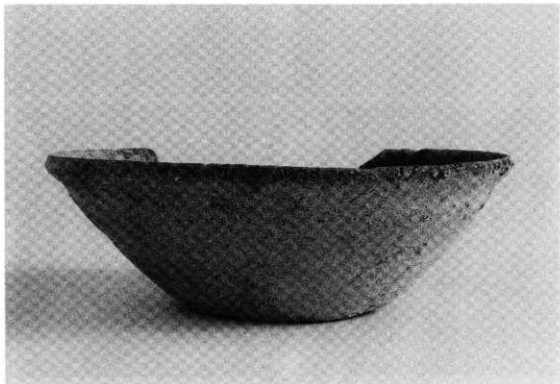
圖版48 上 留木古窯出土山茶碗 (圖12-305・E1類)
下 同上底面



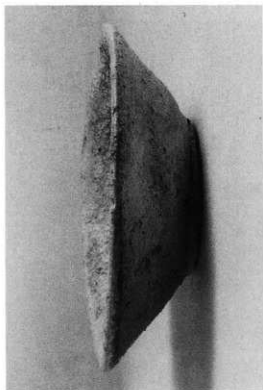
图版49 上 留木古窯出土山茶碗 (関14-394・E2類)
下 同上底面



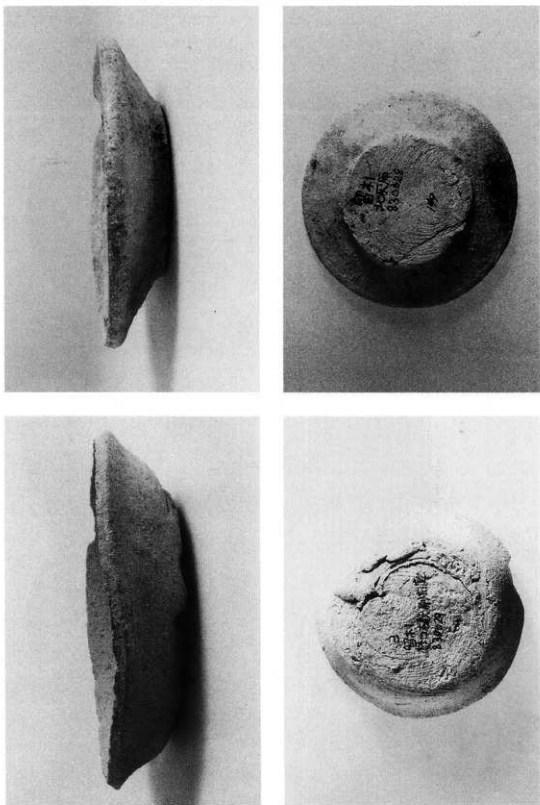
图版50 上 留木古窯出土山茶碗(图16-446·下類)
下 同上底面



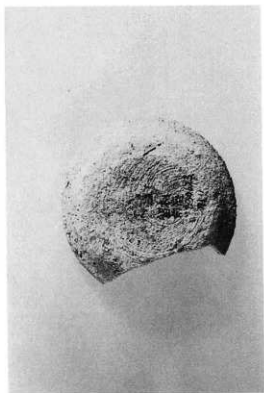
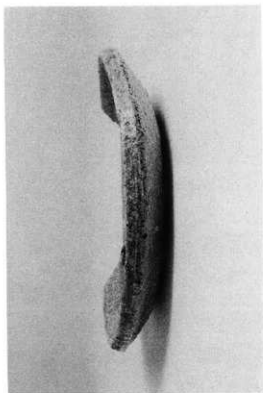
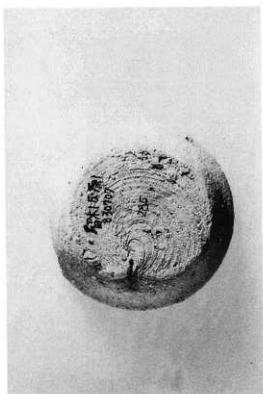
圖版51 上 留木古窯出土山茶碗 (圖16-456·G類)
下 同上底面



图版五二 留木古窯出土小皿
右上・图六十六一・a類 右下・同上底面
左上・图六十五四・a類 左下・同上底面



图版五三 留木古窯出土小皿
 右上：圖八二一四四・b類 右下：同上底面
 左上：圖二一二五四・C類 右下：同上底面

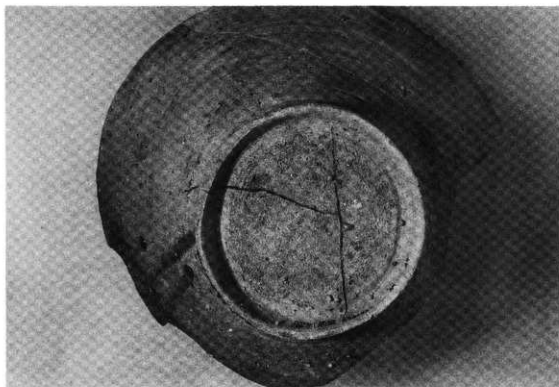


图版五四 带木古鬲出土小皿
右上·图二七五五四·d 類 右下·同上底面
左上·图二七五五四·e 類 右下·同上底面



圖版五五 留木古窯出土小皿

右左：圖二八十五八五，e六類 右左：同上底面
左左：圖二八十五九四，e八類 右左：同上底面



图版56 上 留木古窯出土片口鉢（图19-613·工類）Ⅱ
下 同上底面



圖版57 上 留木古窯出土片口鉢 (圖22-636・Ⅱ類)
下 同上 底面



圖版58 上 留木古窯出土片口鉢 (圖23-646・Ⅲ類)
下 同上 (圖19-619・Ⅰ類)

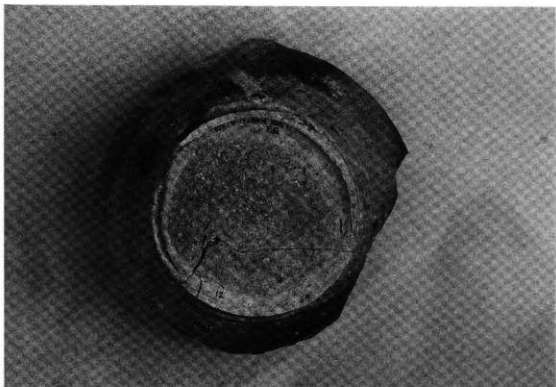
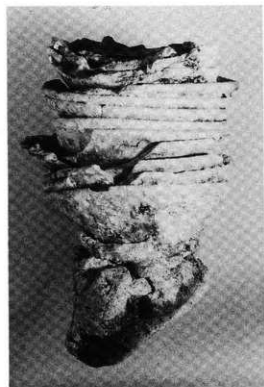
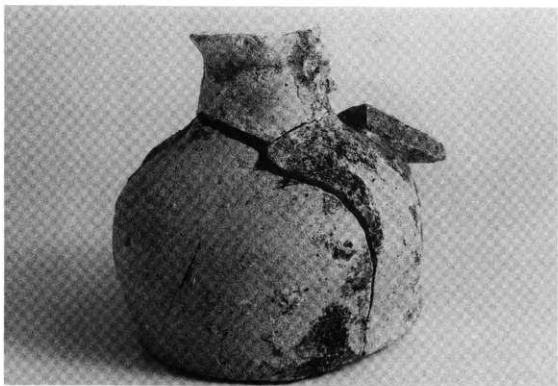


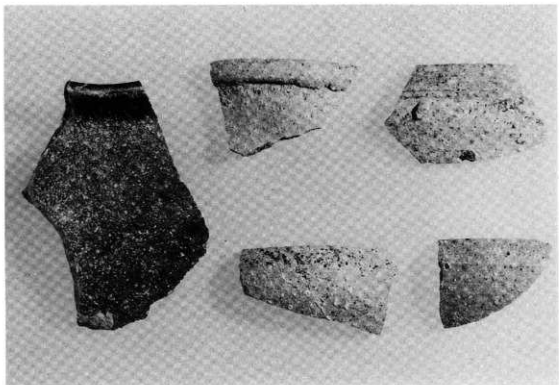
圖59 上 留木古窯出土片鉢 (圖23-655·IV類)
下 同上底面



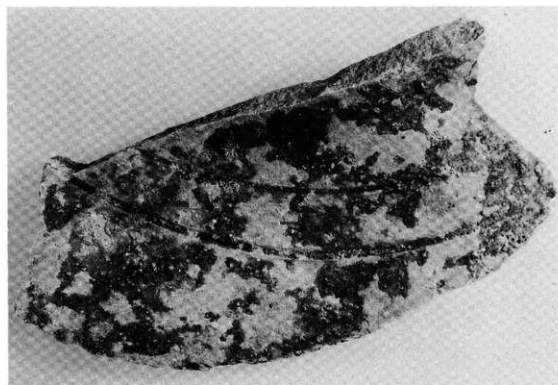
圖版60 上 留木古窯出土片口山茶碗 (図18-607)
下 左・焼台と山茶碗の重なり状態 右・円盤状陶製粘土塊



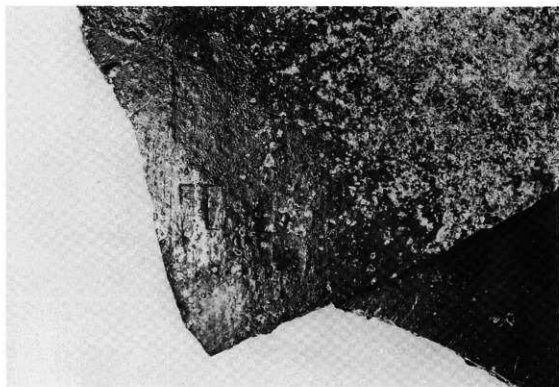
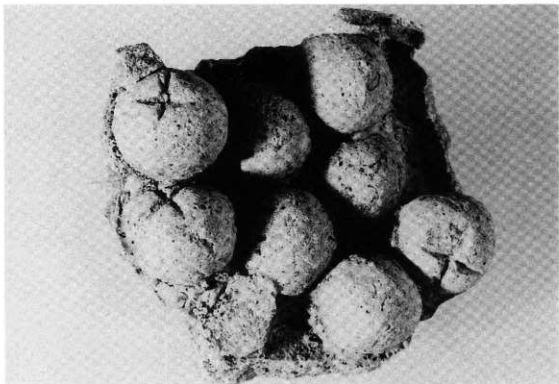
图版61 上 留木古窯出土台付椀
下 同上 片口小壺



圖版62 上 留木古廩出土短頸壺・玉縁状口縁壺・片口碗
下 同上 広口壺



図版63 上 留木古窯出土広口壺
下 同上 肩部沈線(2条めぐる)



図版64 上 留木古窯出土陶丸
下 同上 大妻胴部格子目の押印文

大木之本遺跡発掘調査報告
付載 留木第8号窟発掘調査報告

平成3年(1991)3月28日印刷

平成3年(1991)3月28日発行

編集・発行 東海市教育委員会

愛知県東海市中央町一丁目1番地

印刷 株式会社紙鉄印刷所

